

図書館発展の新たな息吹



早稲田大学図書館
館長 浦川 道太郎

この図書館年報は、1998年度における早稲田大学図書館の成長の記録である。

成長が時間的な連続の中で生じるものと考えれば、98年度における成長も以前からの発展の一段階に過ぎない。しかしながら、この1年間の図書館の成長の記録の中には、単なる連続的な発展とだけでは評価しきれない、21世紀の大学図書館にとって極めて大きな意義を持つ2つの出来事が含まれている。

その一つは、1987年から長年にわたって使用してきたWINE(早稲田大学学術情報システム)を新たなWINEに切り換えたことである。新旧WINEの世代交代は、ユーザーインターフェースの改善にとどまらず、INNOPACシステムという世界標準のプラットフォームによりインターネット環境と完全に結合して、世界中の図書館との本や情報の自由な流通を可能にし、世界的な電子図書館ネットワークを形成する手掛かりを得たことを意味している。

また第二の出来事は、ARL(アメリカ研究図書館協会)のJapan Projectに参加し、アメリカの有力図書館との間のILL(図書館間相互貸借)を開始したことである。このILLは、国内で実施されている従来のものと相違して、インターネットを通じて電子情報の形で資料の送付と課金の清算を実行するものであり、新時代のILLの在り方を示すものである。

上記の二つ出来事は、それぞれ別個の独立したものであるが、この二つの出来事が収斂する先には、国内外に開かれたWINEを通じた世界の図書館との本や資料のILLサービスの実現という、21世紀の図書館の姿が見えてくるのではないだろうか。

本年報に示された報告や数字の中に、未来に向かって進む早稲田大学図書館の姿を見いだしていただければ幸いです。



1998年度の主な動き



中央図書館

WINE SYSTEM

新WINEシステムの稼働

WINEシステムは運用開始からすでに10年以上経過し、利用者からインターフェイスの向上を求められていた。また現在のコンピュータ技術の向上に対応したシステムの再構築が求められており、最終的にアメリカのInnovative Interfaces社が提供するINNOPACシステムを採用し、日本語機能などを付加して新WINEシステムとすることを決定した。膨大な書誌・所蔵データや利用者データの移行を経て、1998年11月から情報検索、貸出返却管理など基本的機能を順次稼働させ、1999年4月から本稼働の予定である。

利用規則の整備

WINEの稼働箇所は中央図書館をはじめ、キャンパス図書館、国際教育センターや演劇博物館なども加え8箇所へのぼる。新システムをより効果的に活用するには、これら箇所の運用規則をできるだけ平準化することが課題となっている。図書館としては歴史的な経緯は十分考慮したうえで、不必要な格差は努めて均一化し、中央図書館、キャンパス図書館等を一つの早稲田大学図書館ととらえ、資料の共同利用のあり方を考える時期にあると認識している。このことろふまえ、中央図書館は199年から行ってきた資料の延滞に対する課金措置を、新システムへの移行を機に他の箇所にあわせて反則点制に変更した。設定にあたっては平準化を意識し、各箇所との調整に努めた。

情報利用環境の整備

新WINEシステムの稼働を機に、中央図書館をはじめ、WINE稼働箇所の端末を一新した。端末性能の向上もあり、より快適な環境が整備されたことになる。新システムは研究室や自宅からでもインターネット環境をつづいて図書館ホームページから容易にアクセスできる。インターネットの爆発的な普及、それに呼応したネット上を流れる学術情報の増加に応じて、図書館ではホームページの充実、活用に力を入れている。雑誌記事索引(国立国会図書館)のホームページ画面からの利用やOCLC First Searchサービスなど外部データベースへのより容易なアクセスなどを工夫している。またWINEの利用指導の他、利用希望の多いCD-ROMなど他の電子媒体の利用もあわせ講習会を開催するなど利用促進に努めている。

海外図書館との協力

1994年に図書館は世界最大の書誌ユーティリティであるOCLC(Online Computer Library Center)に和書遡及データ約30万件を提供した。この提供にたいする海外からの反響は大きく、早稲田大学図書館へのILL(図書館間相互貸借)申し込みの増加にあらわれている。今年度は、あらたに30万件の追加分データを提供することを決めた。今回のデータ提供は中央図書館所蔵図書(洋書)に対応するOCLCデータ交換という側面もあるが、なにより情報の享受ばかりでなく、海外への情報発信の意味を持つ。早稲田大学図書館は1998年9月にARL(Association of Research Libraries)/NCC(National Coordinating Committee for Japanese Library Resources) Japan Projectに参加することとし、同参加機関のうちイェール大など北米12研究機関と箇所間協定を締結し、1998年11月より相互にILL(図書館間相互貸借)サービスを開始した。



学術情報課

1998年1月5日に新図書館システムを部分的にはあるが、稼働させることができた。新図書館システムの検討を始めた当初から既存のパッケージシステムを導入することを意図していたが、米国で開発され、70館近くの欧米・アジアの大規模な大学図書館や研究図書館に導入されているINNOPACという優れたシステムをベースとして、日本語処理機能等を付加し運用している。引き続き、1999年4月の本稼働を期して主として日本語処理に関わる作業を続けている。本稼働の暁には、検索機能がより一層強化されることになる。

メディアネットワークセンター(MNC)によって推進されてきた「電子図書館プロジェクト」の一環として構築された電子図書館パイロットシステムに、これまで蓄積してきた「雑誌記事索引」1990-96年分のデータに加えて、1997年以降のデータを毎年入手し、学内からのアクセスに限定して利用者に提供している。また、「電子博物館プロジェクト」の一環として計画された「早稲田と文学」等のデータベース化に協力した。

1996年4月に図書館ホームページを開設したが、広報の媒体としてさらに充実したものにするため、その後も更新を続けてきた。1998年度はホームページのメニューのひとつとして「学術情報リンク集」を設け、図書館の蔵書と併せてインターネット上の各種データベースを研究・学習に活用し得るようにした。



図書課

図書課設置3年目となる1998年度は、和書流通本の取次変更(トーハン 日販)、新WNEシステム(INNOPAC)への移行など、大きな環境条件の変化があった。とりわけ、新システム立ち上げに関して、少なからぬ人手と時間を割かざるを得なかったが、他方では、6月異動者の後任がなく、また海外研修者も出したことで事実上の減員となり、かなり苦しい業務運営を余儀なくされた。この事態に対処するため、これまでの業務分担を組み替え、兼担体制を増やしたが、総体として時間外勤務の量は増えた。

そうした条件下で、選書・収集の質的レベルを落とさぬよう最大限の努力をした。

和書流通本はトーハンから日販へ取次変更をしたが、見計らい本の質がよくなり、中途から新刊情報による発注に切り替えた。さらに図書予算が厳しいこともあって厳選せざるを得ず、購入冊数が前年比約87%とダウンした。しかし必須資料は購入できていると思われる。洋書については選書アドバイザーの有益な指摘もあり、ほぼ順調に推移したが、人手が足りないため蔵書評価のための調査は一回にとどめざるを得なかった。

1月に仮稼働した新図書館システムは、研究書庫に関しては現在のところ混乱なく移行できている。また、INNOPACでは、以前のDOBISにおいては使用しなかった収書サブシステム(発注/受入)を99年4月より稼働の予定で、学術情報課と協力して検討にあたった。

今年度も数多くの寄贈図書が中央図書館に寄せられた。なかには貴重な資料も含まれ、それ自体は喜ばしいことであるが、重複図書の処置が大きな問題となってきている。地下3階書庫の書架も空き棚があとわずかで、地下3階書庫への展開が具体的な問題となっている。新年度はまず重複図書の処理に手をつけたい。

このほか、例年のことであるが各種展覧会の企画・実施運営には図書課のスタッフが中心となってかわり、年間12回の展示会開催をおおむね好評裡に終えることができた。また、雄松堂書店との共同事業である「大正期文芸書マイクロ化」も大過なく順調に推移している。





整理課

今年度は新システムを稼働させることを課の最大目標として取り組んだ。目録データベース、蔵書管理、OPAC検索の1月稼働を目標に目録ワーキング・グループを形成し、短期完成を期して詰めた業務を行った。

現在動いている最新のシステムの導入を目指したため、データベースの構築、旧システムからのデータのコンバートと今までに経験したことのない作業が非常に多かったが、旧システムからの移行は全体としてスムーズに出来たと考えている。

中国語圏では動いているとはいえ、アメリカのシステムに日本語化(ローカライゼーション)を施すのは当初考えていたより負担の大きいものであった。まだ、計画通りの段階まで進んでいないが、間もなくすべての機能が利用できる予定である。

整理課でデータ化を行なっている箇所は昨年と同様、中央図書館研究図書・一般図書、高田早苗記念研究図書館とその構成教員図書室配架図書、語学教育研究所、国際部、演劇博物館であり、これらの図書館に所属する新規受入図書を年度内にデータ化することを目標として業務を遂行した。また、未入力図書についてはOCLCのデータを最大限利用してこの2年間に25,000冊ほどのデータ化を現物図書より行った。語研洋書第二期、演博洋書第二期と旧社研洋書はOCLC RetroCorを利用して遡及入力を行ない1999年度の早い時期にWINEにロードする予定である。

データ化で特に取り上げることには以下の通りである。

和書は、研究書庫内の明治期刊行図書の主要な主題と演博遡及図書のデータ化に努めた。

洋書は、中央図書館コレクション(マティアス・コレクション、ポーランド史関係コレクション、Helbig Collection等)のデータ化に努めた。高田記念図書館では、国際機関関係の資料(EDC、ILO、OECD、IMF等)と政研・経研読移管図書のデータ化を引き続き行い、また環境問題コレクション、Community care Collecionnoのデータベース化を行った。



総合閲覧課

1998年度、総合閲覧課では、多様化する図書館サービスへの対応、利用者へのサービス提供の積極的なはたらきかけを目標とした。図書館内外の情報検索環境の充実にとともに、利用者は図書館に来なくても情報検索できるようになってきている。レファレンス・カウンターでは利用者が積極的に「図書館ホームページ」や「学術情報リンク集」を利用できるよう、積極的な紹介に努めた。また、新WINEが1月にWEB上に公開され、ますます蔵書検索はしやすくなったが、一方、インターネット端末にふれたことのない利用者もあり、「新WINEゆくり講習会」を開催し、好評であった。また、春、秋2回開催された「学術情報検索講習会」では、総合閲覧課員が中心となってCD-ROMやインターネット端末を使つての情報検索の方法を紹介した。

情報検索で必要な資料を知り得た結果、資料の所蔵箇所を探すことになるが、早稲田大学内で所蔵していないものについては、慶応大学とのILL(相互貸借)による貸借や複写の取寄せ、国内ILL、海外ILLの利用を薦めている。図書購入費の増額が見込めない昨今、ILL利用の拡大は重要な課題となっている。1月には、ARL/NCC Japan Project参加の北米にある12の研究図書館と協定を結び、相互にILLサービスを開始した。また、国内ILLについてもNACSIS-ILLの利用についての検討を開始した。これらを契機として、ILLサービスにかかわる迅速なサービス提供、双方の事務手続き、特に料金決裁の方法の簡素化などの課題について検討を開始したい。しかし、手続き業務の簡素化は、一方で申込み受付の増加でもあり、今後、ILLサービスにかかわる業務を図書館全体としてどのように位置付けていくかが検討課題である。





1998年度は、新WINEシステムへの移行の準備を経て、雑誌システムの一部稼働を開始した大きな節目の年であった。旧WINEから新WINEへの雑誌データの変換を皮切りに、新雑誌システムのスタディとトレーニング、そして製本雑誌の所蔵データやチェックインレコードの入力などに着手し、99年度の全面稼働に向けて鋭意作業を進めている。

その一方で、当年度の課題であった、旧社会科学研究所図書室から移管された雑誌、新聞、マイクロ資料の整理、製本、受入を軌道に乗せ、利用者への提供を開始した。

また、利用者へのサービス面では、オリエンテーションの一環として5月と10月に雑誌・新聞記事検索のCD-ROM講習会を開催したほか、4月からG4Faxによる雑誌論文の提供を開始し、離れたキャンパス図書館の利用者が中央図書館に来館することなく、複写機と同程度に鮮明なコピーの入手を可能にした。この他、新着雑誌・新聞コーナーの配架や見出しの改善を図り、より探し易く・より利用し易い環境の整備に努めた。

なお、資料費の高騰もあり、厳しい財政状況への対応策として、一部の和雑誌と洋新聞の納入業者を見直し、少しでも予算を有効に活用できるよう努力した。それとともに、とりわけ価格の高騰が激しい洋雑誌の問題を全学的に検討し、今後における早稲田大学図書館の洋雑誌およびそれに関連するデジタル情報の収集・利用に関する方向性を見出すためのワーキンググループを設置し、目下、報告書の作成に向けて調査、分析を行っているところである。

AV業務

AVルームの利用者サービスの状況は音声資料の利用に減少が目立つものの、映像資料の利用は12時から17時の時間帯を中心にかなりの待ちが常態化している。AVホールの上映会は、著作権に留意しつつ国内・外の名画を中心に行った。当室の映像資料リストをホームページで公開しているが、近年の特徴として教員からの授業使用用資料貸出(複製による)申込が増えて来ている。また他大学図書館から、利用の可否の問合せが増えている。

資料収集に関しては、ジャンル別利用者統計の分析、利用者からのリクエスト、教員の要望など参考に、当室の「AV資料選択基準」に基き、各種ツールを活用し、収集に努めた。昨年度のSPLEコードのMD変換を受け、今年度は所蔵付けを完了し、利用者へ情報を提供している。

複写・マイクロ業務

昨年度より開始した夏季及び冬季休業期間のサービス時間の17時までの1時間延長は、16:00-17:00の利用者数が9:00-11:00のそれを上回るなど利用者サービスの向上につながっている。複写・撮影業務そのものは(株)ニチマイに委託しておこなっており順調に推移している。統計からも明らかであるが、ILLの拡大に伴う複写依頼件数の増大は著しいものがあり、学内利用件数は益々増加の傾向にある。

マイクロ資料所蔵リストを図書館ホームページ上で公開し利用者への情報提供を強化している。またマイクロ資料に付随して増加するCD-ROM検索サービスを充実したり、マイクロ資料の内容を国内資料・外国資料の二部門に分けて紹介した当マイクロ資料室作成「解題冊子目録」を活用するなど資料の使い易さに努めている。

今年度も資料紹介セミナーとして、11月に「米国立公文書館所蔵 日本関係文書」を企画・開催した。出席者は学外関係者も加え100人を超える盛況であった。





開館して5年が経過し、当館の存在が利用者の方に定着してきたと言ってよいであろう。利用者数・貸出数は前年度と比べて大きな違いは見られない。

当館が発足する前に各教員図書室等で受け入れた洋書については、各図書室が付与した請求記号のまま配架し、蔵書管理を行ってきたが、利用者には配架場所がわかりづかった。そこで配架を一本化して、利用しやすくするために、洋書の分類切替作業を6月下旬に開始した。対象となる約15万冊のうち、これまでに約6万冊以上の作業を行った。なお、作業は99年度も継続して行い、2000年3月完了の予定で進めている。作業が完了したあとで全面的な移動作業を行い、配架場所を決定することとなる。それまでは利用者の方々にはご不便をおかけすることもあろう。ご理解をお願いする次第である。

昨年と同じく2月の入試期間中に開館しながら蔵書点検作業を行った。今年度は利用頻度が比較的高い法律・経済・歴史・文学の洋書約8万冊について行った。閉館することなく作業を行ったので、利用者の方々にはご迷惑をおかけすることとなったが、ご理解をいただき感謝している。ちなみに欠本は4冊であった。分類切替作業の最中であり、実質的な欠本はさらに少なくなると思われる。



1997年度から実施した新しい学習図書の選書方法は着実に機能し、利用者から好評を得ている。今年度は蔵書内容の一層の充実を目指して、従来購入の対象外となっていた文庫・新書について改めて購入の可否を検討した結果、文庫4種、新書2種の購入が決定した。評判は良好で、整理途上の図書の閲覧を請求する利用者も少なくない。配架されるのを傍らで待っていてすぐ借りだす光景もみられる。

また、学習図書の受入冊数は96年度2,957冊、97年度3,739冊、98年度7,000冊弱と飛躍的に増大している。今年度の受入冊数の内約2,700冊が文庫・新書である。

一方、高額図書については、1997年度第3回運営委員会で当該年度内に随時選定することが決定されたことをうけて、今年度が新しい購入体制の初年度となった。ただし、随時選定といっても予算の枠は限られているので、年2回行われている研究図書共通選定と高額図書選定を同時に行うことによって、特定の専修・専攻の推薦に片寄ることなく、バランスよく選定することができた。また、同時期選定のもうひとつのメリットは、共通図書と高額図書の予算枠を柔軟に扱うことによってより有効な予算執行ができたことにある。

4月から開始したG4Fαによる学内所蔵の雑誌論文取り寄せサービスは、戸山図書館から他館への申込みは42件であった。今後、より活用されるよう働きかけたい。

秋から冬にかけては新WINEの一部稼働に伴い、職員の研修、利用規程の改訂などで極めて多忙な時期であったが、大きな問題もなく移行できたといえる。図書検索方法に関する質問はほとんどなくなり、利用者にとって使いやすいシステムであると言えるだろう。

2月のロックアウト期間中には、戸山図書館開館以来の懸案だったウォータークーラー3台の設置と階カウンター照明の改善が実現した。利用環境を整備し、より使いやすい図書館にしていきたいと考えている。



理工学図書館

書庫の狭隘化はどの図書館でも対応を急がれる課題であるが、幸いにも5号館理工学図書館では同館地下2階に念願の増設書庫が設置された。これにより約3万冊のスペースが確保され、8月に図書、外国語雑誌約20万冊の資料再配置(移動)作業を行った。

一方、電子化・情報化の進展も著しく、フルテキストで提供できる電子ジャーナルは年度初めの3誌から3倍近くまで増誌でき、将来は書庫狭隘化対策の一助になることが期待される。また念願であった情報サーバがようやく設置され、学内LANを介した化学系二次資料「Chemical Abstracts」の提供を開始した。

1月から部分運用を開始した新WINEシステムは順調に稼働しており、4月からの本稼働が待たれている。学生読書室では従来より個別に貸出・返却システムを運用してきたが、ハード・ソフトとも多くの問題が山積していた。このため1月からの新WINE稼働を契機に全面的に新WINEに切り替え、この個別システムは3月をもって運用を停止することとした。

理工学図書館の資料購入費の60-70%は外国語雑誌の購入で占められており、毎年の版元価格の値上がりと外貨レートの変動は資料購入費の執行に大きな影響を及ぼしている。1998年度は版元値上がり率10%に加えて支払い時期の円安状態のため、外国語雑誌の支払いが予想外の大幅増となり、苦しい予算執行となった。1999年度には新たな対策を検討せざるをえない。

学生読書室の利用率は相変わらず高水準を維持(年間貸出し冊数約20万冊と推定)しており、5号館理工学図書館でのレファレンス量も毎年20%増の右肩上がりが続いている。理工学図書館ではこうした限られたスペース、ファンド、要員などでいかに利用者満足度を維持・発展させるかが大きな課題となっている。



所沢図書館

外国雑誌の高騰の波がいよいよ所沢図書館にも押し寄せ、1999年の契約についてはついにタイトル削減が不可避となった。結果的には10タイトルの継続中止を決定したが、それでも1998年度に比較して外国雑誌に要する予算の総額は増大している。1999年度の外国雑誌価格は為替レートの変動も含め前年比約30パーセントの値上がりとなってしまったことになる。幸いなことにこれまでは実際にこのような事態に直面しないまま済んでいたが、これからは本格的に対策を検討しなくてはならない。

所沢図書館では所沢キャンパスのHUMANET内で利用できるCD-ROMデータベースサーバを稼働している。しかし、何らかの障害があった時、館員の知識ではその対応に困難があり、より円滑に対応できる状況を実現できるよう検討していた。その結果、HUMANETを管理している情報システム運営室の協力が得られることになり、その管理下へサーバを移設することが承認された。運営室では専門の業者が常駐しており、障害の発生には速やかに対応できることになる。

資料廃棄について、今年度は「INDEX MEDICUS」と年鑑・白書の古いものを処分した。前者は今では完全にオンラインデータベースのMEDLINEが代替手段となっており、冊子としての索引は利用者がなくなっているためである。また、後者は中央図書館その他で保存されているため、所沢図書館で責任保存する必要のないものである。



各委員会報告

資料委員会

1998年1月の役職者交代にともない、酒井農史副館長、本間暁事務副部長兼総務課長が資料委員会委員をはずれ、メンバーは次の通りとなった。兼築信行副館長、旭英樹総務課長、松下眞也図書課長(委員長)、吉田伸一整理課長、北風貴紫雑誌課長、中西裕高田記念図書館担当課長、井上真理子戸山図書館担当課長。

ほぼ二ヶ月に一回委員会を開催(緊急の必要あるときは随時)、併またはセツト100万円以上の高額資料の購入申請につき、可否を審議している。購入決定したものは図書館報「ふみくら」で広報し、申請者、価格、取扱業者をふくめ情報開示している。

1998年度は年間9件の高額資料購入申請があり、慎重な審議を経て、うち7件を購入可とし、2件を保留とした。また前年度保留になっていた案件のうち3件を購入可とした。

広報委員会

広報委員会のもとには、展示部会、「図書館紀要」編集部会、「ふみくら」編集部会、「薫」編集部会、オリエンテーション部会があり、それぞれ活動している。また、その他に総務課と協力して、図書館広報活動が円滑に行われるよう企画・提言をおこなっている。

今年度、利用者に対する広報誌としては、「ふみくら」59-61号を発行した。また、「図書館紀要」については第46号を刊行した。

展示部会は、学内外で数多くの展示会を積極的に開催、または協力しており、なかでも「錦絵にみる近代日本の夜明け展」は、5月の「オール早稲田文化週間」での展示を皮切りに、所沢図書館、軽井沢町、鴨川市でも開催し、図書館資料を広く一般の方に見ていただく機会となった。各展示会の内容は、P.26をご覧ください。

オリエンテーション部会では、例年の新入生向け図書館ツアー、WINE講習に加え、春、秋にも学術情報検索講習会を開催して、WINE以外の情報検索入手方法を利用者にした。また、新WINE移行後には、インターネット端末操作に重点をおいた「新WINEゆっくり講習会」を企画し好評であった。

また、新WINE移行にともなう各種お知らせやホームページでの広報など箇所間の調整をふくめて利用者への広報サービスの促進にも努めた。



ネットワーク 委員会

1996年10月よりサービスを開始しているOCLC FirstSearchの利用について、従来はパスワードを個人配布方式で行っていた。今年度は利用期限の迫っていた契約サーチの利用延長をOCLCと交渉し、実現すると同時に図書館ホームページからの自動ログ・オン方式に変更した。一方で学内の端末環境の整備充実、利用促進キャンペーンなどもあり今年度の利用実績は前年度に倍加する勢いで伸びている。

従来本庄分館、理工学図書館、所沢図書館間で実施していたG4Faxによる雑誌論文の取り寄せについて、4月から中央図書館、戸山図書館もそのネットワークの範囲に加えて展開している。また1月の新WINEシステムへの移行を機に中央図書館およびキャンパス図書館などWINEシステム運用箇所間で利用規則等平準化にむけて調整をはかった。

研修委員会

1998年度の研修参加の詳細は本年報の「研修受講者等」の欄を参照いただきたい。

図書館業務も情報化や国際化の進展を受けて、大きく様変わりを見せているなかで、研修の位置付けは重要になっている。従来からの語学研修や私立大学図書館協会等が主催する研修に加えて、近年では情報データベースに関する研修への積極的参加などその範囲も多様化している。本年は新WINEシステムに移行したこともあり、システム移行関連業務も含めて毎日の業務がある意味では研修の連続であったとも言える。研修委員会としては、これらの研修の整備を行いつつ、図書館職員に積極的な参加を働きかけている。

図書館システム 委員会

図書館として1997年6月に標記の委員会を組織し、図書館システムの主管箇所であるメディアネットワークセンター(MNC)と協力して次期図書館システム導入に関する政策的問題を審議し、協力業者に対応してきた。システムの具体的な各機能については委員会の下に設けられたワーキンググループで検討してきた。

MNCとのより一層の協力体制を構築するため、1998年1月にメディアネットワークセンターの役職者を含めて再編成し、全学情報環境の一環としての次期図書館システムについて協議を続けている。

1998年11月から新図書館システムが部分稼働している。今後、全面稼働に向けて、日本語処理機能を強化させていく予定である。



新WINEシステムの導入について

図書館システム委員会

1 新WINEシステムの 導入まで

早稲田大学の図書館システムWINEは、1998年11月5日から新しいシステムに移行し、一般にも公開された。新システムとしては、米国の Innovative Interfaces Inc. 以下、「Innovativ社」と略すの提供する NNOPACというシステムを導入し、日本語処理等を可能にするための開発を行った。予定していたシステムの機能で実現していないものもあり、1999年4月5日現在、本格稼動にむけて最終的な詰め作業を行っている。現時点でなお積み残された課題が少なくないとはいえ、インターネットのWorld Wide Web (WWW) に対応したインターフェースの実現など、従来に比して著しく改善を見た点が多い。1年ぶりのシステム変更にあたっては、図書館およびメディアネットワークセンター共同のプロジェクトを組織して進めた。ここでは、過去1年間の図書館活動の中で大きな比重を持つことになった新システムの導入および稼動について報告する。

1 旧WINEから 新システムへ 移行する際の課題

旧WINEシステム (DOBISWINE) は、ドイツで開発された IBM社の DOBISLIBISを、本学と日本 IBM社が共同で日本語化開発を行ったものであり、1987年5月、所沢図書館開館と同時に早稲田大学において稼働を開始した。その後、旧WINEを運用するキャンパス図書館が、中央図書館ほかの各キャンパス図書館や図書室に広がり、共同の書誌情報と各館個別の所蔵データ情報管理をもって、図書館サービスの要として機能してきた。また、この旧WINEを若干修正して JAPAN MARCオリジナルデータの再現性に富む別環境として作った DOBISWINE (KINOWINE) システムは、(株)紀伊国屋書店との「和書データ遡及入力共同事業」の要のツールとしても機能してきた。この環境で作成された当館の和書遡及データ30万件が1995年に世界最大の書誌ユーティリティOCLCにデータロードされ、米国図書館界でも高く評価されている。

1993年夏には、日本でも2,3番目という初期の段階でインターネット上に図書館目録システム公開 (TELNET版) を行い、日本 IBM社が旧WINEをもとに製品化した日本語対応システム DOBISの導入館は日本で一時30を越えるに至った。

こうした重要な役割を果たしてきた旧WINEシステムは、検索時およびデータ更新時におけるレスポンス速度と、書誌データのコントロール性において秀でており、総じて内外の評価は高かったと言える。

しかし、様々なプログラム内部的な改良を行ってきたものの、インターネットを中心に劇的に進展する情報環境に見合った機能の追加などはできず、図書館利用者や図書館各箇所からシステムの改善要求が出ても対応できないまま、時間だけ経過した。

そして、直接には旧WINEシステムの200年対応問題が引き金となり、そのまま投資を行って200年対応問題をクリアしながら旧WINEシステムを引き続き使用するか、まったく別のシステムに移行して旧WINEで解決できなかった諸問題をクリアしていくかの選択を迫られることになった。

検討の結果、下記の3点すべての問題を旧WINEシステムでクリアするのは難しいと判断し、他のシステムの導入を模索することを決定した。

1

システム維持費用の削減

旧W NEはMVSを利用したホストマシン対応であり、その維持費用がかなり高額であった。また、システムのソースプログラムがユーザ側に公開されているためにユーザ側で自由にプログラム修正できて便利な反面、通常業務としての統計データ算出から機能改良まで常に自前でプログラム改良を行うことになり、結果としてメーカーのバックアップを受ける「製品」ではなく、常に「半開発状態」の早稲田大学単独のシステムといってもよい性格のものとなっていた。「製品」とはいえない部分で自前のサポートをしなければならないために、維持の面でもプログラム言語を知悉したプログラマが必要となり、結果的にシステムの維持費用を押し上げていた。

2

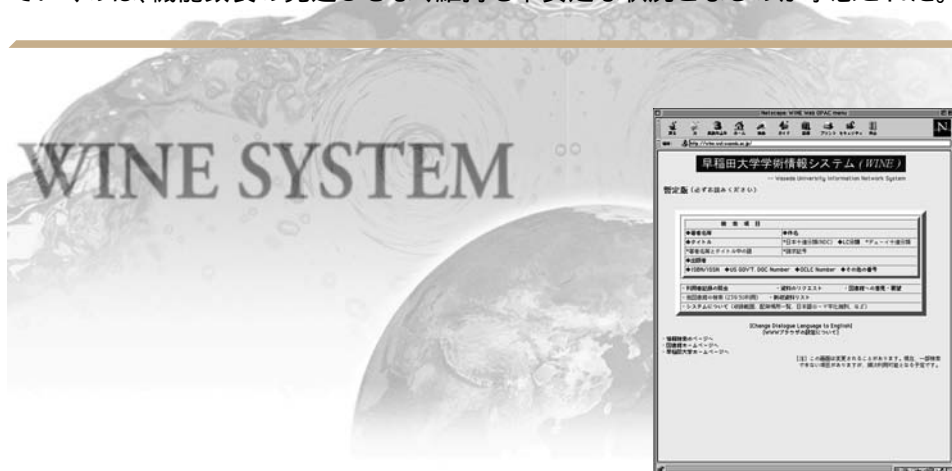
WWW対応など インターフェイスの刷新

特に1990年代に入ってから日本におけるインターネットの爆発的な普及はWWWの普及と同時に言える現象であったが、旧W NEはWWW対応機能を備えていなかった。TELNETでインターネット上に公開しているものの、そもそもTELNET利用自体がWWWに慣れた利用者にはわかりにくいのに加えて、旧W NEの検索方法についても大多数の利用者には、検索しにくいシステムとなりつつあった。システム本体はそのままのWWW対応版を開発することも一時検討したが、それを作るだけでもかなりの投資が必要であり、できたとしてもWWW特有のリンクを駆使したものとはならず、今後の利用者へのサービス機能の拡張は望めないことは明らかであった。

3

2000年対応問題

旧W NEは2000年対応するためのプログラム修正費用を必要としていた。この問題は、旧W NEの問題にとどまらず、それを取り巻く基幹ソフトのCICS、MVS等の2000年対応まで含んでおり、クリアしようとすればかなり大規模(高額)な投資が必要であった。旧W NEシステムの姉妹と呼べる製品DOB S /Eをサポートしている日本 BM社は、自社のもう一つの図書館システムL bV is ionに軸軸を移しており、DOB S /Eのサポートを打ち切る方針が出ていた。こうした状況のシステムを今後維持していくのは、機能改良の見通しもなく維持も不安定な状況となるのが予想された。



2

新システム選定の条件

1

データ量とレスポンス速度

旧WINEシステムから他システムへと移行する決定のキーとなった前項3つの条件(システム維持費用の削減、WWW対応、2000年対応問題)に加えて、実際にシステム移行を行うことを考えると、次期システムとして選定するシステムの必須条件として下記のものがあった。これらをキーにして次期システムの候補としての他の図書館システム製品を選定することとなったが、検討時点において決定的要素を備えたシステムが見あたらなかった。システム改善要求としては、図書館内部でも早期から検討を進めてきており、多項目にわたっていが、ここではその中でも主要な4点について記しておく。

旧WINEでは、和書・洋書あわせて書誌データ約130万件、所蔵データ約250万件を保持しており、日本の図書館システムの中でも有数のデータ保有量を誇るものであった。しかも、これら大量のデータを抱えながら、検索時・データ処理時の処理スピードにおいて特筆すべき速さを維持しており、旧システム評価の大きな要因ともなっていた。次期システムにおいてこの処理速度が、極端に遅くなることだけは避けなければならなかった。実際に候補となる他の図書館システムを吟味してみると、世間的に高い評価を受けているシステムでもデータ保有量の限界があることなどが判明し、またそれに加えて処理スピードとなると我々の求めるレベルをクリアする保証のあるものは、少なくとも日本においては皆無とさえ言えた。

WINE SYSTEM



2

書誌データ移行上の 問題と書誌データの 保存方法

旧WNEシステムでは、和書の遡及データは現物の資料にあたって入力し、また洋書のデータ入力についてもOCLCデータを流用するなどデータの質的にも誇ることもできる書誌データを保持していた。一方で経緯により入力規則上異種なデータが混在してしまい、その統一化が望まれるといった問題も発生していた。これらのデータの質の保持、および異種なデータの混在といった条件を抱えながら、違うシステムに書誌データを移行させるためには、これまでの経緯をよく知悉しているプログラマの協力と、受け皿としての新システムの書誌データ保持方法の質の高さが問われた。ここでいう「書誌データ保持方法の質の高さ」とは、我々が旧WNEシステムの運用面での反省・要望から狙いを定めていたもので、書誌データを交換する際のフォーマットとして定められているMARC（機械可読目録）が持っているTAG、indicator、Subfield情報をそのまま保持する形の書誌データ保持方法のことである。ちなみに日本の大学で一般に流通している書誌データは文部省学術情報センターのNACSISのものであるが、そのデータはMARC形式ではない。このこともあって、総じて日本で使われているシステムは、LC MARCが確固たる位置付けをもつ米国のシステムとは違ってMARC保持という観点では貧弱なものであった。

3

各所蔵館ごとに違う 貸出規定

旧WNEシステムを導入・運用している中央図書館以外の図書館・室は、同じWNEシステムを利用するという面ではつながっているが独立した組織であり、運営については各館それぞれにある図書館運営委員会で決定されている。この独立性により各館で貸出規定・反則規定などの利用規程類が統一なく制定されてきている。一つのシステム内でこれらの多様な貸出規程・反則規程類を適用・運用することはシステム上困難なことであるが、旧WNEシステムでは、所蔵データを各館独自に運用できる機能を備えていたこともあり運用できていた。ところが他のシステムを見てみると、この不統一な利用規程の運用がネックとなった。システム参加館内の利用規程は統一しなければ利用できないシステム構成であるのがほとんどであった。将来的に利用規程が統一されることは目標ではあるが、新システムの導入を理由に実施することは避けたい事項であったし、また、各館の独立性ゆえにすぐに実施できる事項でもなかった。

4

クライアントサーバ対応の 「製品」システム導入 による省コスト化

旧WNEシステムの維持費用が高額なものとなっていた反省として、クライアント・サーバ型のパッケージ・システムとしての「製品」であることを新システムの条件に掲げた。メーカーがサポートする「製品」を使用することは、本学固有の条件に合わせることができずに不便な反面、業務の標準化につながり、また情報化の進展に合わせたバージョン・アップのサービスを受けられる可能性がある。それに、何よりシステム維持に関する省コスト化を期待した。

次期システム検討の過程で、早大スタッフは内外のさまざまな図書館システムを独自に調査し、要件をまとめる上での参考とした。NNOPACシステムもそのような調査の対象であったが、検討を深めるにつれ、この製品の持つ多彩な機能、そして米国を中心とする海外の図書館界で得ている高い評価が強く意識されるようになった。開発のパートナーであった日本IBMと、システム要件検討の過程でさまざまな議論を重ねた結果、この NNOPACを本学次期図書館システムとして採用することを決定した。「製品」を導入するという方針を維持する一方、日本で最初のユーザとなることから、日本語の処理を可能にするなどの開発を Innovativ社と共同で進めることになった。

NNOPACを提供している Innovativ社は、カリフォルニア大学バークレー校の図書館システムに関わったメンバを中心に、1978年に設立された会社である。以後一貫して、図書館システムに特化したソフトウェア開発と販売を手がけてきた。NNOPACは同社が今日提供している唯一の製品であり、世界中で700近いユーザを擁している。その中には、他のシステムに例を見ないほど多数の大規模図書館が含まれているばかりではなく、米国OhioLINK オハイオ州の広域図書館ネットワーク、書誌レコード640万、所蔵レコード240万件のデータ規模 10ユーザのひとつであるなど、本学にとっての関心事であった大量データ処理に十分耐えることは実証済みであると判断できた。加えて特記すべきは、NNOPACが北米や欧州のみならず、アジアにも少なからずユーザを持っている点で、中国、台湾、香港の漢字圏各地域において導入例がある。それらの地域では中国語の漢字がシステム処理されており、日本語対応の前提である2バイト文字コード処理が NNOPACですでに実現していることも、システムの導入を促す背景になったといえる。

NNOPACの個別の機能的特徴については、以下の項でも必要に応じて触れていくが、ここで概略的に紹介するならば、次のような点を指摘することができるであろう。これらは、本学が次期図書館システムの要件として検討した結果とも合致するものであった。

- 入力に対する迅速なシステム応答
- 24時間稼働が可能
- 公開検索画面のWWW対応
- 使いやすいユーザーインターフェースの実現
- 外部システムとのゲートウェイ機能
- 旧WINEで不十分であった業務処理面の機能の充実
- 貸出/返却/利用者管理におけるきめこまかなオプションの提供
- 延滞督促などの通知業務におけるE-mailの利用可能性

*システムの提供する諸機能とその特徴について限られた紙数で詳述することはとうてい不可能であり、くわしい情報については、Innovativ社のホームページ <http://www.iii.com/>を参照いただきたい。

NNOPACの導入にあたっては、日本においては本学と日本IBM社とが共同でプロジェクトを組織して進めたが、システム提供者である Innovativ社との接触が必要であったことはいうまでもない。契約についての交渉から、スタッフの派遣来日による研修会の開催、日本語化をはじめとする開発、そしてそれらにともなうE-mailのやりとりなど同社との接点は広範に及んだ。そのことについては別項で述べる。



2 INNOPAC 日本語版開発

1

文字コードの選択 (内部コードはEACC)

2

日本語の特殊性と US/Mフォーマットの 採用

INNOPACシステムはタイ語、アラビア語など多言語を扱うことができる。特に次期システムとの関連でいえば、漢字を扱うことができ、中国、台湾、香港などで数多くの導入実績を持っている点が大きく関係している。またデータ保持方法についても、US MARCとChina MARCといった複数のMARCデータを混在させることもできる仕組みを備えている点も検討の対象であった。本学では、これらの条件をもとに、まだ実際に動かしていない INNOPACシステムの機能についてマニュアルを読み、日本語対応版開発について日本 IBM社のサポートのもと、仕様を定め、Innovative社の開発陣とE mailのやりとりを行いながら開発について適宜検証を行った。その過程においていくつか決断を迫られ、その都度重要な選択を行ってきた。中でも主要な文字コード、MARC、分かち等に関して下に記す。

日本語データの国際規格はJISであるが、日本語を扱うワープロなど圧倒的多くのアプリケーション・ソフトは2バイトのShift-JISで動いている。新WINシステムにおいても当然Shift-JIS、JISのいずれかのコードの採用になるものと漠然とながら期待していた。

ところが、米国のCJK(中国語、日本語、韓国語)目録に対応して開発された INNOPACシステムは、内部コードとして3バイトのEACC(East Asian Character Codes)を用いて漢字に対応していることもあって、Innovative社では、日本語対応のために特別に別の内部コードを採用する意図はなかった。将来的にUNICODEがスタンダードになるであろうとの推測もその態度決定の要因となっていたものと思われる。

本学は内部コードをEACCとすることに反対はしなかったが、データの入出力に関しては全般にわたってShift-JISを標準とし、E mailに関しては国際規格として標準のJISCコードとする旨Innovative社と合意して開発を依頼した。この文字コードの変換・検証作業ではこれまでに経験したことのない種の問題に接することとなり難航もした。

書誌データの標準的な交換形式として、ほぼ国別にMARC機械可読目録フォーマットが定められている。和書においては、国立国会図書館作成のJAPAN MARCがあり、英語を中心とした洋書においてはUS MARCがある。INNOPACは複数MARCを許容する仕組みを持っており、次期システムではJAPAN MARCとLC MARCの併存という選択肢もあったのだが、本学としては、和書においてJAPAN MARCとの親和性を図りながらも、結果として和書・洋書とも統一したUS MARCを採用することとした。理由としては、JAPAN MARCのTAG構成が、読みデータへの対応などでかなり特殊な構造を持っているためにシステム対応が困難なことと、複数のMARCを保持すると書誌データ(indexなど)の整備が難しくなることなどがあげられる。ただし、US MARCフォーマットで日本語データを扱うとした場合、米国では英数字以外の漢字などは正規のTAG(TAG245=タイトルなど)を用いず、正規のTAGに関連づけられた特殊TAG880を用いて行うのが主流であるが、「自国の主要文字は正規のTAGで入力すべきだ」とのInnovative社側の主張に同意し、正規TAG内で漢字かな混じり表記、カタカナ読み、ローマ字読みの3種のデータを、Subfieldに関連付けデータを持たせて保持することにした。

3

分かちを意識せず 日本語を検索できる 途中語検索

DOB ISにおいては、文節ごとにスペースで区切ったデータ入力をし、タイトル検索などでの途中語からの検索を可能にしていた。一方で、INNOPAQにおける中国語のワード検索は文字単位の集合検索を基本としていた。INNOPAQの日本語化にあたってはこの点でも協議の対象となったが、「そもそも日本語の分かちは万人共通の理解事項ではない」、「文字単位の集合検索ではひらがな / カタカナデータについては有効に機能しない」という2点が問題の焦点であった。そこで日本 IBM社からこの2点を解決するものとして、「文字の並びを意識しながらデータ途中のどの文字からも検索できる」仕様、すなわち仮に「途中語検索」と呼ぶ仕様が提唱され、Innovative社の合意のもと開発することになった。

この「途中語検索」においては、たとえば「日本人社会の歴史」というタイトルがあった場合、間にスペースなしの「日本人社会の歴史」というデータをもとに、「日本」「日本人」「社会」「歴史」といった検索語はもちろん、「本人社会の歴史」「社会の歴史」「会の歴史」「の歴史」など余分とおもわれる語からでも検索することができることになる。検索者は基本的に有意な文字列を検索語として用いるので、こうした余分な indexの弊害は先、これまで検索漏れとなっていたこの機能により救われることが期待される。

ちなみに、この「途中語検索」は和書の主要な標目のみ検索対象とし、洋書と和書の3Dデータについては、スペース分かちを単位とした標準的なワード検索を提供することにした。図書内に含まれる論文等のデータを含んだ「内容注記」の検索についても、同様にスペース分かち単位の検索を基本としている。

4

その他

オリジナルが英語である各種メニュー画面、メッセージ類総計約 700行について、本学側で実際に画面上で表示されているのを確かめながら翻訳を行った。漢字かな等は1字で8バイト分を要するため、要所要所でエリア拡張変更もともなった。他にも、日本語化に関する作業は多々あり、典拠レコードの管理方法についても日本語データを処理する上で有効な仕組みを開発した。



WINE SYSTEM

3 INNOPAC 日本語版開発に 付随した開発

① カナ読みデータからの ローマ字自動発生

② 紀伊国屋書店の データベースから データを流用する 仕組み

書誌データの入力については、他の書誌ユーティリティと呼ばれるデータベース上のデータ、あるいは磁気テープ等に収められたMARCデータを流用して行うのが現在の図書館の趨勢である。これまで当館も、和書についてはJAPAN MARC、TRC MARCやJAPAN MARC準拠である紀伊国屋書店のKN MARC、洋書についてはLC MARC、OCLCデータなどを流用して自館システムへの書誌データ入力・構築を行ってきた。

次期システムとしてもこの種のユーティリティを確保しなければ、入力作業の迅速化を図ることができないため、次の2つの書誌作成作業を支援するUS MARCへの変換プログラムや、システムを構築した。

旧W INEでは日本語図書に関してローマ字データを入力していなかったが、外国からのアクセスも考慮し、新W INEシステムでは漢字仮名混じり表記データ、カナ読みデータに加えて、ローマ字読みデータの3種のデータを持つことにした。日本語のローマ字化については、訓令式とヘボン式の2つの選択肢があった。JAPAN MARCでは訓令式でローマ字がデータ入力されており、こちらが日本においては「正当」なローマ字化方法ではあるが、本学ではヘボン式を選出した。マスコミなどで使われる日本語データのローマ字化はヘボン式であり、利用者になじみやすいと思われることと、欧米で日本語を表示する際もヘボン式であることなどが選択理由である。

旧W INEから新W INEシステムへの移行分については、バッチ処理によりローマ字を生成してデータ追加し、新W INEシステム上で新規作成するデータについては、作業途中でカナ読みデータを元に自動的にローマ字データを生成する仕組みを新システムに組み込んだ形で開発した。実際には、新聞記事へのカナ読みデータ付与プログラム等で実績がある株 平和情報センターのHAPPINESSというシステムを利用し、それにローマ字を派生する仕組みを追加する形であった。できあがった機能としては、書誌データ作成途中で、漢字仮名混じりデータから、一気に分かちされたカナ読みデータおよびローマ字読みデータを生成する仕組みも備えている。

本学側にMARC形式のデータを保持できる簡易DBを作成し、そこへ紀伊国屋書店で作成されたKN MARCを1日おきに追加する仕組みを開発した。簡易DBに追加する過程では、KNMARCをUS MARC型に変換し、ヨミデータからローマ字データを発生・追加する仕組みも備えている。新システムで書誌データを作成する際は、その簡易DB上のデータをWindowのカット&ペースト機能により流用することになる。

4 開発の体制

ハードウェアの更新が契約で1998年秋に予定されていたことから、図書館システムの更新もそれにあわせて実現すべきことは既定の方針となっていた。それにむけての準備は早々に開始していたのであるが、紆余曲折もあり、INNOVACの採用が決まった時には、システム稼動予定まで半年に満たない日数しか残されていなかった。その間に、日本語化開発はもとより、システムの各種設定項目の定義、各業務レベルでのシステム理解の促進と業務処理フローの検討(しばしば、運用面の見直しを伴う)、日本語マニュアルの作成、研修、広報、また他方では、旧WINEが蓄積してきたデータ(書誌、所蔵、利用者、貸出の各情報)のINNOVACへの円滑な移行などの課題に直面した。

本学における次期図書館システムの開発は、メディアネットワークセンター(MNC)が主管箇所として予算と全体の進捗を調整したが、システムを直接利用する立場として、図書館が全面的に関わったことはいうまでもない。上述の作業を進めるにあたっては、MNCと学術情報課の担当スタッフとともに、多数の図書館員が業務別ワーキンググループのメンバーとして、あるいは直接間接の協力者としてこれに加わった。

プロジェクトのパートナーとしての日本IBM社も、INNOVAC導入が決定されてから、新たな陣容による早大サポート体制を組んだ。その範囲はハードウェアに関わる問題から、INNOVACの詳細についての調査、日本語化開発、データの検証、システムフローの検討、マニュアル化、Innovative社との連絡など、あらゆる面にわたった。

開発の他方の当事者は、Innovative社である。同社は、ソフトウェアのインストール、テスト環境の提供、本学の要望にそった設定値のシステムへの反映、移行データのロード、各業務システムの研修会の実施など、通常の新規ユーザに対して行う作業とともに、前述の日本語化に伴うソフトウェア開発を行った。これらの作業は、研修会への講師の来日派遣を除き、すべて米国で行われた。日米間でやりとりをして進めるべき課題は多数あったが、それらは主としてemailでなされた。Innovative社に日本語を解するスタッフがないこともあり、日本語化開発で日本IBM社から社員が派遣された時期を除いては、コミュニケーションはすべて英語で行われている。

Innovative社は方針として、プログラムのソース・コードを一切公開していない。プログラムの更新や、早大サイトのシステム設定や変更でユーザが関与できない処理はすべて、米国からの遠隔操作でなされている。また、完成された製品を提供するという立場を堅持し、個別の機能変更要求は受け付けず、同社が認めた変更は製品自体のバージョン・アップに際して実現されることになる。これは、本学におけるシステムの「カスタマイズ」をしばしば行ってきた旧WINEとはまったく異なる。ユーザの要望がただちに反映されない点は窮屈にも思えるが、システム導入の過程では、プロジェクトの目的を限定する意義を有したともいえる。システム開発においてしばしば問題となる要件定義の変更にもなう混乱といった事態を、避けることができたからである。また、独自のシステム改変ができないということは逆に、システムのバージョン・アップ(ユーザ数が多いほど、一般にその信頼性は高まる)がなされた時にはその成果を享受すればよい。新WINEの構築にあたって、早大独自のものを作り込まないという当初からの方針が維持されたことになる。



5 システムの導入、 研修、運用

Innovative社のサポート

1 システム・ プロファイルの設定

システムを安定的に運用するためには、ユーザが製品についての正確な知識を持ち、システムの立ち上げに必要な初期設定等を適切に行い、処理の流れに習熟することが必要である。これはユーザの責務であるとともに、システム提供者側にも、そのために必要な情報提供や支援が求められる。NNOPACについては、Innovative社が標準的なサポート方法をすでに確立しており、本学への導入に際してもそれが適用された。次のようなサポートがあった。

2 TestPAC検証

多岐にわたる初期設定対象項目の中でもとりわけ目録データ関係部分は、書誌所蔵にかかわる微細な諸項目を NNOPAC上の項目とどのように関連づけるかという作業を伴う。その決定は、図書館システムの根幹といえる索引化の成否に直結する重要事項である。

Innovative社の担当スタッフが本学を訪れ、この点を中心としてシステムの初期設定(プロファイリング)の仕方についての指導があった(98年7月)。

3 システム研修

上記の指導を経てユーザが決めたプロファイルの内容は、実際のシステムの中で適正に動作するか否かを点検する必要がある。そのためのテスト環境(TestPACと命名されている)がInnovative社によってインストールされた後、その環境における検証作業についてのトレーニングが行われた(98年9月)。検証作業の結果によりプロファイルに必要な修正を加えた後に、旧システムからのデータ移行が実施された。

4 NNOPAC Users Manual

NNOPACの各業務システム(目録、蔵書管理、ILL、収書、雑誌)ならびにシステム管理(データのロード、バックアップ等)の研修が順次行われた(98年9~11月)。

5 Innovative社の 体制

NNOPACのマニュアル(英文)は、CD-ROMで提供されている。印刷すると2,000ページを超える分量になる。早大およびIBM社のスタッフはそれぞれの担当部分を読むとともに、実際のシステム動作を確認したうえで、操作フローの日本語化等を行った。98年1月にハードを入れ替えたこととともない、図書館員の業務用PCにこのマニュアルをインストールし、館員は必要に応じてこれを参照している。

NNOPACの新規導入にあたっては、ソフトウェアのインストールや移行データのロード、あるいは上述したプロファイリングや研修などにInnovative社が担当者を割り当てて対応した。日本語化開発は特別のプロジェクトが同社内に設けられた。早大側からの質問やリクエストは課題ごとに宛先を変えてE-mail送信した。これはいわばシステム立ち上げに伴うサポート体制であった。99年4月からは、新規に発生する問題はその内容の如何によらず、すべてInnovative社のHelp deskに連絡することになった。受付は常時行われ、緊急の場合(システムダウン等)は電話連絡にも対応する。

6 各業務について

1

目録作成

旧システムとはまったくといっていいほど仕組みの違い、MARC TAGを意識した目録入力作業となることについて業務レベルでの混乱を心配したが、書誌ユーティリティ OCLC のデータを流用した洋書データの優れた入力方法と、前述した INNOPAC 日本語版開発に付随した機能の開発・運用による和書の入力方法、および入力マニュアル準備とにより、スムーズに業務移行ができた。

ただし、システム移行に伴い目録データの不統一性が顕在化し、今後統一をとったデータとすべく作業を行う課題が残った。また典拠データの管理方法が旧 W NE システムと全く違った仕組みであり、今後検索上の便宜を図るためにも日々登録されるデータの調整管理作業を行う体制づくりが今後の課題となっている。

2

蔵書管理

当初より、蔵書管理機能に関してはどのシステムも性能に大差がなく、図書館システムの中で貸出返却機能は既に「落ち着いている」という認識にあった。ただ一つだけ懸念されたのは、システムの応答スピードである。200万を超える所蔵データを蓄積し、旧システムが維持していたレスポンスを保證できるかどうか懸念されたが、運用後、旧システムに比べて遜色ないスピードで処理されており安堵している。

これまでの DOB ISW NE システムは「館の集まり」という概念が大きくあったが、INNOPAC においてはその作りから自然と「早稲田全体」という視点に立たされる。館毎での貸出 罰則ルールの差異、各館毎に分かれている利用者データ、など利用者にとって決して分かり易い状態にあるとは言えない。今後の課題として、利用者の利便性向上及び、他館返却 貸出等の新規サービス導入を容易にするためにも今後すっきりとした形に見直すことが必要であろう。

3

発注・受入

旧 W NE でも、システムによる発注・受入処理は行われていたが、処理の仕方が煩雑であるなどの問題があり、広く用いられるには至らなかった。INNOPAC の当該機能はそれに比してはるかにすぐれているので、発注・受入システムの適用範囲を拡大する方向で準備し、それが実現した。システムの目的としては、発注情報の共有によって収書効率を高めることを第一義とし、本学ではすでに財務システムが学内で稼働していることから、会計管理面には重点を置かなかった。

4

逐次刊行物管理

発注・受入と同様に、旧 W NE の中で全面的な稼働を実現できなかった逐次刊行物の処理もまた、INNOPAC 導入によって適用範囲の拡大が実現されつつある。新着号の受入処理(チェックイン)にかかわる業務(受入の記録、未着管理、督促、製本等)や、雑誌の図書館所蔵に関わる情報提供が、これまでとは違って容易に処理できるようになっている。

7 ハードウェア・ ネットワーク環境

1 ハードウェア環境

図書館システムのハードウェアは、当初検討・開発していた日本 IBM社の LibV isiorをベースとしたシステム、および、今後増大するであろう全文・画像情報等の巨大なデータに十全に対応することを前提とした機器から構成されている。先に述べた事由により、LibV isiorを基にしたシステムは稼動するに至らなかったが、これは、IBMのUNIX (AIX)をオペレーションシステムとするデータベースサーバ、アプリケーションサーバ、そしてユーザのPC等には特別なソフトウェアを必要としない構成であった。メインフレーム上で稼動していた以前のWINE (DOBIS/ LIBIS)の応答速度を下回らない、という図書館員から強い要望があった要件から、データベースサーバにはIBMの並列処理型マルチノード・ワークステーション 9076-309 (IBM SP) アプリケーションサーバには7025-F50複数台を内部ATMスイッチで接続した構成とし、マルチノードのデータベースサーバは、リレーショナル・データベースを使った業務用データベースサーバ、高速な全文検索エンジンを使った検索用データベースサーバを含んでいた。

NNOPACシステムはリレーショナル・データベースを基にしたシステムと比較した場合、遥かに小さなコンピュータ資源で運転することが可能である。このため、現在のWINE本体は、前述したデータベースサーバ中の1つのノードのみで稼動している。ちなみに、データベースサーバの他のノードは、業務参照用データベースや様々なデータを蓄積するファイルサーバとして利用している。また、メインフレームでは必須だった月に一度の定期点検やデータベース再編の必要が無いため、基本的には24時間 年中稼動となっている。

2 ネットワーク環境

WINEが稼動しているIBM SPのノードは、直接、大学の研究教育用基幹ネットワークに100MのEthernet-SWを介して接続している。メインフレームで稼動していた旧WINEは、基本的に大学内部だけの業務用ネットワークに接続していた。インターネット経由でのアクセスを可能とするために専用のプロトコル変換器は装備していたが、業務用アプリケーションとは切り離れたセキュリティを配慮した構成であった。しかし、書誌情報から様々な外部の情報に直接リンクが張られる、Innovativ社のメンテナンスがインターネット経由で行われる、世界中で700に近い図書館での実績がある、等々から直接インターネットに接続する研究教育用ネットワークに接続することにした。これに伴い、図書館員の業務用PCもインターネットに直接繋がることになった。館員の情報収集の利便性は飛躍的に向上したと思われる。しかし、学内の事務用ネットワークにはアクセス不可能なため、一人につき二台のPCを原則的に配置することになってしまった。

図書館に来館した利用者はもとより、インターネットに接続しWWWブラウザがある環境を持てば、誰でも自由にWINEへのアクセスが可能となっている。しかし、図書館内に設置した多くのPCに関しては、WINE以外の外部の情報にアクセスしPCを長時間占有したり、ネットワーク上のいたずらを未然に防ぐために、学外にアクセスできないようネットワークで設定をしている。(図書館内には、もちろん、学内の他の端末室と同じように利用者認証を経てインターネットに出ることが可能な端末も設置している)



8 現時点での 総合評価と 今後の課題

暫定稼動が開始してから半年足らずであり、予定した機能で実現していないものもある現状で、システムを総括するのは時機尚早であろう。しかし、WWW対応により、簡単な操作方法と、検索結果からリンクで関連情報をたどるなどの諸機能の利用者への提供は、情報環境の進展に応じたサービスの刷新であったと図書館では考えている。

図書館業務面についても、新WINEにおいて実現されたシステムの諸機能が、直接あるいは間接にサービスの向上をもたらしていくことが期待される。

開発について述べるならば、現時点で未実現項目の解決と、INNOVAC本体のバージョン・アップに伴うバグの解消が、急を要する課題であることはいままでもない。これについては、Innovative社に繰り返し要求して対応を促しているところである。しかし、半年足らずの間に、驚くべき進展があったことは強調に余りあるであろう。プロジェクトの推進にあたっては、MNC図書館学術情報課スタッフの関与はもとよりであるが、現場の図書館員多数の参加があり、そのことがシステムの大過なき更新に寄与したといえる。

今後の課題としては、新WINEのさらなる有効利用ということがある。既製品として提供されている諸機能をすべて稼動しているわけではないので、今後、必要度や業務への影響を検討する必要がある。一方で、稼動ずみの諸機能についても、実際にどのように業務に当てはめるかという点では選択肢がありうる。システムの動きから業務を見直し、場合によっては図書館の運用方法を改めることが望ましい点もないとはいえない。そうした再検討を行うに際しては、あくまでも利用者サービスの向上という視点を基礎としなければならないであろう。



WINE SYSTEM



新WINE

開発年表

- 1996年 11月 MNCおよび図書館の管理職メンバーによる「新図書館システム委員会」を設置し、その下に各業務別のワーキンググループを設置する。
- 1997年 9月 日本 IBM社の LibV isionバージョン・アップ版を想定した次期図書館システム構築計画および契約が理事会にて承認される。
- 1998年 3月 想定していた LibV isionバージョン・アップ版では本学の機能要件が満たされないことが判明し、以後日本 IBM社を開発パートナーと位置付けた他システム (NNOPAC) の導入を模索することになる。
- 1998年 3月 NNOPACの中国語環境で運用している香港中文大学図書館を視察。
- 1998年 4月 Innovative社の上級副社長 Stephen Silberstein氏が来館、NNOPACシステムの説明会および質疑応答を行う。
- 1998年 5月 次期図書館システム委員会において、NNOPAC日本語版をもって本学の次期図書館システムとすることが承認される。
その後米国サンフランシスコの Innovative社に赴き、NNOPAC日本語版開発に関する具体的な可能性について討議する。
- 1998年 7月 本学が要求する日本語版開発仕様を条件に盛り込んだ NNOPACシステムの導入について、Innovative社、日本 IBM社との三者間の契約を行う
- 1998年 7月 Worksheet(各種設定テーブルと50,000件のテストデータを Innovative社へ送付する。
- 1998年 10月 1998年 9月 2日までに作成された書誌・所蔵データを次期システムへ移行する。
(書誌件数: 1,349,614 所蔵件数: 2,549,435)
- 1998年 10月末 利用者データなど残りのデータを次期システムへ移行
~ 11月 4日 図書館・図書室の端末を全面的に刷新する。
- 1998年 11月 5日 目録、蔵書管理、利用者検索機能をもって、利用者へのサービスを開始する。
以後、引き続き、1999年 4月の全面稼働を期して主として日本語処理に関わる作業を続ける。



1998年度図書館日誌

中央図書館の主要行事はP26～P30に掲載

	中央図書館	高田早苗記念研究図書館
1998年 4月	1 入学式につき父兄に図書館を開放 4 新入職員図書館見学	27 第1回兼務者連絡会 28 第1回運営委員会
5月		
6月	1 新入館員研修(1回目) 29 第1回図書館協議委員会	22 旧分類洋書の新分野への切替作業開始
7月	6 図書館情報大学実習生研修(2名 7/24まで) 13 夏季特別貸付受付(8/24まで) 19 夏季休業期間(開館時間短縮 9/15まで) 21 全館員集会 23 オープンキャンパスにつき2階、4階AVホール開放 24 図羊会(図書館職員OB・OG会)	19 夏季休業期間(開館時間短縮 9/15まで)
8月		入試業務に伴う構内立
9月	1 慶應義塾大学・立教大学実習生研修(9/14まで)	
10月	7 臨時図書館協議委員会 12 国立国会図書館研修生実習(10/15まで) 17 井深大展(10/25まで) 25 ホームカミングデーにつき図書館を開放 30 WINE更新作業のため臨時休館(11/4まで) 30 国公立大学図書館協力委員会	2 第2回兼務者連絡会 6 第2回運営委員会
11月	4 新WINEシステム導入全館員集会 5 新WINEシステム稼働・説明会	
12月	1 冬季特別貸付受付(12/28まで) 7 第2回図書館協議委員会 7 新入館員研修(2回目 12/9、12/14～16) 17 冬季休業期間(開館時間短縮 1/7まで)	11 第3回兼務者連絡会 17 冬季休業期間(開館時間短縮 1/7まで)
1999年 1月		
2月	8 春季休業時間(開館時間短縮 2/25まで)	16 蔵書点検(2/25まで)
3月	1 蔵書点検につき休館(3/6まで) 臨時閲覧室設置(3/6まで) 5 全館員集会 25 卒業式につき父兄に図書館を開放 30 早慶図書館管理職者懇談会 31 中央図書館消防訓練	23 第4回兼務者連絡会

戸山図書館	理工学図書館	所沢図書館
1 入学式につき父兄に図書館を開放 13 WINE 講習会 (4/17 まで) 24 新任運営委員・助手説明会 28 第 1 回運営委員会	23 第 1 回図書委員会	3 大学院生オリエンテーション 8 新入生対象オリエンテーション (4/14 まで)
26 第 2 回運営委員会		20 第 1 回運営委員会
5 第 1 回学習図書選書作業部会 30 第 3 回運営委員会	25 第 2 回図書委員会	1 人間科学部ウィーク所沢図書館展示会 (6/7 まで)
3 第 2 回学習図書選書作業部会 16 夏季長期貸出受付 (9/4 まで)	19 夏季休業期間 (開館・開室時間短縮 9/15 まで) 21 [学生読書室] 夏季特別貸出受付 (8/27 まで)	15 第 2 回図書委員会 15 夏季長期貸出受付 (9/10 まで) 21 夏季休業期間 (開館時間短縮 9/15 まで)
構内立入禁止のため閉	4 [学生図書室] 書庫移動のため書庫閉 室 (8/7 まで) 5 書庫移動のため地下 2 階書庫閉室 (8/7 まで) 17 書庫移動のため閉室 (8/21 まで) 24 地下 2 階増設書庫運用開始	
25 第 3 回学習図書選書作業部会	30 第 3 回図書委員会	
13 第 4 回運営委員会	29 理工展期間 (開館時間短縮、学生読書 室閉室 11/4 まで)	28 第 3 回図書委員会
13 第 4 回学習図書選書作業部会	1 新 WINE システム稼働開始、学生読書 室も新 WINE へ参加し、貸出しシステ ム切り替え 12 第 4 回図書委員会	
7 冬季長期貸出受付 (12/25 まで) 11 第 5 回学習図書選書作業部会	17 冬季休業期間 (開館・開室時間短縮 1/7 まで)	10 冬季長期貸出受付 (12/28 まで) 17 冬季休業期間 (開館時間短縮 1/7 ま で)
	28 第 5 回図書委員会	
1 春季長期貸出受付 (2/10 まで) 2 第 6 回学習図書選書作業部会 9 第 5 回運営委員会 18 蔵書点検 (3/14 まで)	7 春季休業期間 (開館・開室時間短縮 3/31 まで) 12 [学生読書室] 入試業務に伴う構内立 入禁止のため閉室 (2/25 まで) 16 入試業務のため閉館	3 第 4 回図書委員会 8 春季休業期間 (開館時間短縮 3/31 まで) 8 蔵書点検により閉館 (2/19 まで) 20 館 (2/25 まで)
25 卒業式につき父兄に図書館を開放	25 蔵書点検のため閉館 (3/31 まで) 31 学生読書室貸出しシステム運用停止	

主要行事

展覧会

展覧会名	月 日	場 所	展 示 内 容
オールワセダ文化週間 錦絵にみる近代日本の夜明け展	1998.5.11 ～ 5.17	総合学術情報センター 2階展示室	幕末から明治初年にかけて板行された世相風俗を映す錦絵約60点を展示。黒船来航、戊辰戦争、文明開化、西南戦争などを庶民の視点でとらえた貴重な同時代資料。
オールワセダ文化週間 古活字版でたどる日本の名著	1998.5.11 ～ 5.17	中央図書館 2階通路スペース	「万葉集」「花伝書」など当館所蔵の古活字版約10点を陳列。
オールワセダ文化週間 写真展「早稲田境界」	1998.5.11 ～ 5.17	中央図書館 4階図書館ラウンジ	高田記念図書館・小野田照子さん撮影の写真展。移り変わる早稲田周辺の街のようすと人々を記録した約50点を展示。貴重な映像も数多い。
西洋の歴史的装丁展	1998.9.29 ～ 10.8	総合学術情報センター 2階展示室	コルヴェア文庫を中心とする図書館所蔵の西洋古書を、製本・装丁の歴史の流れに沿って、各時代の標本資料として約40点を展示。幕末日本の最初期の洋式製本、現代ヨーロッパの製本材料・道具もあわせて展示。
早稲田大学図書館所蔵 古文書展	1998. 9.29 ～ 10.12	会津八一記念博物館企画展示室	故荻野三七彦本学名誉教授・元本館館長のご遺族より寄贈された古文書・拓本など新収資料、ならびに重要文化財をふくむ館蔵古文書を展示。
日本中国学会創立50周年記念 大会特別展示	1998.10.10 ～ 10.11	総合学術情報センター 2階展示室	日本中国学会の早稲田大学における開催を記念し、国宝「礼記子本疏義」「玉編」ならびに館蔵の漢籍、画像拓本などを展示。
早稲田大学図書館所蔵洋学資料展	1998.10.16 ～ 10.28	会津八一記念博物館企画展示室	重要文化財「大槻玄澤関係資料」を中心に伊能忠敬地図、大黒屋幸太夫資料、宇田川榕庵使用の薬壇・実験器具などを展示。展示品の一部は「芸術新潮」にも紹介された。
錦絵にみる近代日本の夜明け展	1998.10.31 ～ 11.3	軽井沢町中央公民館	軽井沢町・早稲田大学交流行事の一環として、総合企画部と協力して開催。内容は「オール早稲田」の企画展示と同一。
錦絵にみる近代日本の夜明け展	1998.11.7 ～ 11.15	鴨川市立図書館	鴨川市・早稲田大学交流事業の一環として、総合企画部と協力して開催。早稲田大学コーナーを併設。内容は「オール早稲田」の企画展示と同じ。
ロシア・アバングャルド展	1998.11.25 ～ 12.4	総合学術情報センター 2階展示室	20世紀初頭ロシアに興った実験的综合芸術運動である「ロシア・アバングャルド」運動をテーマとし、館蔵の書籍、雑誌、ポスターなど珍しい資料を展示。
メリーランド大学所蔵プランゲ文庫展	1998.12.5 ～ 12.11	会津八一記念博物館企画展示室	終戦直後の占領期に、アメリカ軍政当局の検閲を受けた新聞・雑誌ほか当時の刊行物が「里帰り」して展示された。メリーランド大学の全面協力のもとに大学が主催。国会図書館協力、朝日新聞社後援。図書館からスタッフを出し展示設営にあたった。
館蔵資料でたどる日本文学史展	1999.3.24 ～ 4.23	総合学術情報センター 2階展示室	卒業式・入学式記念。「源氏物語」「枕草子」「徒然草」ほか日本文学史上名高い作品を、早稲田大学図書館所蔵の古写本や古版本、自筆原稿などでならべる。約60点展示。

してもらおうことを

講演会

講演会名	月 日	場 所	講演者および表題
第4回図書館マイクロ資料紹介セミナー	1998.1 1.13	中央図書館4階AVホール	「米国国立公文書館所蔵日本関係文書資料」をテーマとして、当早稲田大学図書館所蔵のマイクロ資料を多くの研究 開催した。

オリエンテーション

内容	開催期間
新入生対象図書館オリエンテーション	1998.4.3 ~ 4.10
ビデオ「図書館の達人」上映会	1998.4.3 ~ 4.10
WINE システム講習会	1998.5.11 ~ 5.15
新任教員対象オリエンテーション	1998.5.2
情報検索講習会	1998.5.18 ~ 5.22
国際部学生対象オリエンテーション（英語）	1998.9.1 ~ 3
アジア太平洋研究科オリエンテーション	1998.9.2
日本語研究教育センターオリエンテーション	1998.9.8
帰国子女オリエンテーション	1998.11.9
早稲田実業生徒対象オリエンテーション	1999.2.16
外国人留学生対象オリエンテーション（一部英語）	1999.3.29 ~ 30



年間刊行物・印刷物

早稲田大学蔵
資料影印書
洋学篇

冊子目録

展示会目録等

定期刊行物

その他

第16巻 遠西独度涅烏斯草木譜 (第18回配本)1998.4



荻野三七彦旧蔵資料目録1998.8



オールワセダ文化週間錦絵にみる近代日本の夜明け展1998.5

ターライブラリーセ

オールワセダ文化週間図書館の貴重書1998.5

西洋の歴史的装丁展1998.9

早稲田大学図書館所蔵古文書展1998.9

早稲田大学図書館所蔵洋学資料展1998.10

軽井沢町・早稲田交流事業 錦絵にみる近代日本の夜明け展1998.10

ロシア・アバングアルド展1998.11

早稲田大学図書館紀要 .461999.3

ふみくら 59・60・611998.5 ~ 1999.1

蕨 No. 113・1141998.10 ~ 1999.3

クリスマスカード(桂川甫賢「花の図」)1998.11

中央図書館利用ガイド(日本語、英語、中国語、ハングル)1999.3

全学図書館一覧98(日本語、英語、中国語、ハングル)1999.3

中央図書館ポケットカレンダー1999.3

絵葉書(錦絵シリーズ・貴重書シリーズ)1999.3

主な海外からの来訪者



1998年

- 4. 6 浙江大学校長
- 4. 7 ロモノソフ記念モスクワ国立大学総長
- 4.10 ウェスタン・ケンタッキー大学教授
- 4.22 フランス高等師範学校図書館長
- 4.23 ヘルシンキ大学日本学教授
- 5. 6 漢陽大学校（韓国）シンポジウム代表団
- 5.16 ヴェクショー大学（スウェーデン）教授
- 5.25 北京大学教授
- 5.26 淡江大学（中華民国）代表団
- 6. 2 中国青年学生訪日代表団
- 6.18 メリーランド大学図書館長
- 6.30 ユタ大学学生
- 7. 6 ワライラック大学（タイ）図書館長
- 7. 7 中山大学副学長
- 7. 8 日欧産業協力センター研修生（フィンランド）
- 7.21 中正大学（中華民国）教授他
- 8.21 北京大学国際関係学院副教授
米国議会図書館職員
- 9. 3 アウグスブルク大学学長
- 9.14 中国国家外国専門家局訪日団
- 9.16 昆明工学院副学長
- 9.24 ハーバード大学イェンチン研究所副所長
- 10. 1 中国行政官代表団
- 10. 2 オックスフォード大学ウォルフソンカレッジ理事
- 10. 7 マクアリー大学日本研究所所長
- 10. 8 浙江大学副校長
- 10.13 大連理工大学前学長
アラム大学総長
- 10.14 北京師範大学図書館長
- 10.15 ハノイ貿易大学前学長
- 10.22 リール市国際振興局開発部長
- 10.23 クレムソン大学総長
- 10.28 北京行政学院常務副院長
- 10.29 ライデン大学総長

- 10.30 黒龍江大学副学長
- 11.11 フィンランド学協会連盟理事長
- 11.16 河北大学学長
- 11.17 東海大学（中華民国）政治系教授
- 11.18 モスクワ大学交換研究員
- 11.30 上海社会科学院青年訪日団
- 12. 5 メリーランド大学図書館職員
- 12. 8 国際交流基金関西国際センター秘書日本語研修生
- 12. 9 パリ政治学院院長
- 12.10 中国国家外国専局前局長
- 12.15 蘭州大学副学長
- 12.16 ヘルシンキ大学学長
- 12.17 フィンランド文部大臣

1999年

- 1.11 英国高等教育基金評議会議長
- 1.13 ライプツィヒ大学学長
- 1.14 ルンド大学（スウェーデン）国際交流課
- 1.22 ニューヨーク州立大学図書館職員
東国大学校（韓国）
- 2. 1 オハイオ州立大学図書館職員
- 2. 5 全南大学校（韓国）法科大学学長
帝京大学ダラム校（イギリス）図書館職員
- 2. 9 ヘルシンキ工科大学副学長
- 2.16 全米日本研究資料調整委員会（NCC）委員長
- 2.24 チリ共和国特命全権大使
- 3.15 ボン大学教授
- 3.18 ケンブリッジ大学図書館職員
ペルーカトリック大学教授
- 3.23 上海図書館副館長
- 3.24 タマサート大学（タイ）学長
長春税務学院訪日団
- 3.29 OCLC（オンラインコンピュータ）会
長





1998年度 図書館予算・決算

(単位：円)

	予算額	決算額	差異
図書費	584,817,000	590,114,729	- 5,297,729
図書資料費	108,611,000	112,845,192	- 4,234,192
データベース資料費	5,009,000	3,025,764	1,983,236
一般運営経費	55,697,000	43,625,704	12,071,296
修繕費	51,240,000	52,215,798	- 975,798
委託費	177,799,000	146,623,927	31,175,073
賃借料	4,780,000	4,305,996	474,004
設備関係費	23,292,000	36,230,460	- 12,938,460
一般研究費	4,000,000	3,998,353	1,647
予備費	11,722,000	6,544,596	5,177,404
特別運営費	5,786,000	5,527,715	258,285
合計	1,032,753,000	1,005,508,234	27,694,766

1 人件費は含まず。

1998年度 各図書館別 図書費・図書資料費予算

5学部6研究科3研

(単位：円)

	図書費	図書資料費	合計
中央図書館	313,914,000	51,354,000	365,268,000
戸山図書館	51,025,000	25,090,000	76,115,000
理工学図書館	126,837,000	23,142,000	149,979,000
所沢図書館	78,000,000	9,025,000	87,025,000
高田早苗記念研究図書館	296,554,200	33,394,000	329,948,000

注：高田早苗記念研究図書館の図書費・図書資料費は同図書館より執行される関連箇所（
究所）の図書費・図書資料費および図書館予算図書費（高額資料）15,041,000円の合算値。





1998年度 年間受入図書資料数

中央図書館

		購 入		寄 贈		合 計	
		1998年度	前年度	1998年度	前年度	1998年度	前年度
和 書		9,184	10,784	5,031	6,216	14,215	17,000
洋 書		5,489	6,448	4,014	4,311	9,503	10,759
計		14,673	17,232	9,045	10,527	23,718	27,759
雑誌(種)	和	1,066	1,149	3,697	3,647	4,763	4,796
	洋	1,122	1,089	207	210	1,329	1,299
マイクロ資料	(R)	(22) 380	(26) 2,184		(50) 731	(22) 380	(76) 2,915
	(S)	(1) 6,078	(16) 44,176		(5) 10,370	(1) 6,078	(21) 54,546
視聴覚資料(点)		1,286	1,451	35	37	1,321	1,488
一般図書・参考資料(冊)		8,741	8,641	876	1,407	9,617	10,048

()は種類数

高田早苗記念 研究図書館

		購 入		寄 贈		合 計	
		1998年度	前年度	1998年度	前年度	1998年度	前年度
和 書		3,763	4,552	1,275	663	5,038	5,215
洋 書		8,159	9,243	966	209	9,125	9,452
計		11,922	13,795	2,241	872	14,163	14,667
視聴覚資料(種)		4	12	0	0	4	12

戸山図書館

		購 入		寄 贈		合 計	
		1998年度	前年度	1998年度	前年度	1998年度	前年度
和 書		8,811	6,257	618	411	9,429	6,668
洋 書		2,123	2,629	89	292	2,212	2,921
計		10,934	8,886	707	703	11,641	9,589
雑誌(種)	和	284	283	1,073	1,073	1,357	1,356
	洋	372	357	37	36	409	393
視聴覚資料(種)		45	19	1	0	46	19

理工学図書館

		購 入		寄 贈		合 計	
		1998年度	前年度	1998年度	前年度	1998年度	前年度
和 書		726	863	350	264	1,076	1,127
洋 書		1,270	1,485	118	59	1,388	1,544
計		1,996	2,348	468	323	2,464	2,671
雑誌(種)	和	552	543	708	706	1,260	1,143
	洋	926	898	244	245	1,170	1,143
視聴覚資料(種)		8	8	0	0	8	8
視聴覚資料(種)		3,633	3,283	196	156	3,829	3,439

所沢図書館

		購 入		寄 贈		合 計	
		1998年度	前年度	1998年度	前年度	1998年度	前年度
和 書		3,406	4,699	168	704	3,574	5,403
洋 書		758	1,048	21	598	779	1,646
計		4,164	5,747	189	1,302	4,353	7,049
雑誌(種)	和	252	248	125	125	377	373
	洋	557	653	0	1	557	654
視聴覚資料(種)		8	10	1	0	9	10

中央図書館

所蔵資料総数 中央図書館・キャンパス図書館（高田・戸山・理工学・所沢）

	図 書		雑誌（種類）
和 書	2,027,025	和雑誌	18,940
洋 書	1,241,419	洋雑誌	8,965
計	3,268,444	計	27,905

図書（冊数）

		1997年度末数	整理数	移籍増減数	1998年度末累計
研究図書合計		1,486,470	25,422	928	1,512,820
内訳	和 書	997,588	18,022	142	1,015,752
	洋 書	488,882	7,400	786	497,068
雑誌合計		282,278	5,299	0	287,577
内訳	バックナンバー和書	165,282	3,728	0	169,010
	バックナンバー洋書	116,996	1,571	0	118,567
一般図書合計		143,508	9,999	- 397	153,110
内訳	和 書	137,062	9,889	- 391	146,560
	洋 書	6,446	110	- 6	6,550
参考図書合計					4,665
内訳	和 書				4,190
	洋 書				475
参考図書合計		(24,108)			(20,706)
内訳	和 書	(13,259)			(10,513)
	洋 書	(10,849)			(10,193)
総 合 計		1,912,256			1,958,172

注：和には中・ハングルを含む。()は研究図書の参考図書扱い（内数）することとした。

本年度より参考図書は別に計上

雑誌（種類数）

	1997年度末数	新受入	移籍増減数	1998年度末累計
和	9,905	132	0	10,037
洋	3,544	171	0	3,715
計	13,449	303	0	13,752

注：和には中・ハングルを含む。

視聴覚資料（点数）

	1997年度末数	整理数	移籍増減数	1998年度末累計
ビデオテープ	2,527	503	0	3,030
レーザーディスク	4,637	270	0	4,907
CD	10,534	548	0	11,082
録音テープ（含、カセット）	1,502	0	0	1,502
レコード	20,715	0	0	20,715
マイクロフィルム	(1,002) 59,408	1,397	0	(1,016) 60,805
マイクロフィッシュ	(224) 709,686	19,576	0	(228) 729,262
CD-ROM	75	0	- 5	70
その他	170	0	0	170

注：()は種類数

図書（冊数）

	1997年度末数	整理数	移籍増減数	1998年度末累計
和書	187,760	7,135	- 219	194,676
洋書	283,500	12,741	- 431	295,810
計	471,260	19,876	- 650	490,486

視聴覚資料（種類数）

	1997年度末数	整理数	移籍増減数	1998年度末累計
マイクロフィルム	26	0	- 26	0
マイクロフィッシュ	22	0	- 20	2
CD-ROM	12	*4	- 7	5

注：*は継続分を含む

図書（冊数）

		1997年度末数	整理数	移籍増減数	1998年度末累計
研究図書		143,860	2,686	- 36	146,510
内訳	和書	78,101	1,576	- 36	79,641
	洋書	65,759	1,110	0	66,869
学習図書		75,005	5,450	- 66	80,389
内訳	和書	69,945	5,374	- 66	75,253
	洋書	5,060	76	0	5,136
専修室図書		57,837	1,604	0	59,441
内訳	和書	40,101	1,147	0	41,248
	洋書	17,736	457	0	18,193
合計		276,702	9,740	- 102	286,340

雑誌（種類数）

		1997年度末数	新受入	移籍増減数	1998年度末累計
内訳	和	4,224	1	0	4,225
	洋	1,066	16	0	1,082
計		5,290	17	0	5,307

視聴覚資料（種類数）

	1997年度末数	整理数	移籍増減数	1998年度末累計
ビデオテープ	2	1	0	3
マイクロフィルム	30	0	0	30
マイクロフィッシュ	70	0	0	70
CD-ROM	17	29	0	46
その他	10	11	0	21

理工学図書館

図書（冊数）

		1997年度末数	整理数	移籍増減数	1998年度末累計
理工学図書図書館		272,600	7,154	-3	279,751
内訳	和書	92,806	2,264	-2	95,068
	洋書	179,794	4,890	-1	184,683
学生読書室		104,508	3,829	-1,701	106,636
内訳	和書	103,144	3,827	-1,585	105,386
	洋書	1,364	2	-116	1,250
合計		377,108	10,983	-1,704	386,387

雑誌（種類数）

		1997年度末数	新受入	移籍増減数	1998年度末累計
内訳	和	4,079	13	14	4,106
	洋	3,339	29	15	3,383
合計		7,418	42	29	7,489

視聴覚資料（種類数）

	1997年度末数	整理数	移籍増減数	1998年度末累計
ビデオテープ	0	0	0	0
CD	0	0	0	0
録音テープ（含、カセット）	0	0	0	0
レコード	0	0	0	0
マイクロフィルム	12	0	0	12
マイクロフィッシュ	6	0	0	6
CD-ROM	9	8	0	9

所沢図書館

図書（冊数）

	1997年度末数	整理数	移籍増減数	1998年度末累計
和書	95,482	4,809	-50	100,241
和書	44,750	2,109	-41	46,818
合計	140,232	6,918	-91	147,059

雑誌（種類数）

	1997年度末数	新受入	移籍増減数	1998年度末累計
和	568	4	0	572
洋	778	8	-1	785
合計	1,346	12	-1	1,357

視聴覚資料（種類数）

	1997年度末数	整理数	移籍増減数	1998年度末累計
ビデオテープ	204	4	0	208
レーザーディスク	27	0	0	27
録音テープ（含、カセット）	5	0	0	5
マイクロフィルム	35	0	0	35
CD-ROM	17	1	0	18

1998年度 利用状況

開館日数

中央図書館	297日
高田早苗記念図書館	277
戸山図書館	257
理工学図書館	264
理工学部学生図書室	258
所沢図書館	262

注：中央図書館には日曜開館30日を含む

入館者数

	教職員	大学院学生	学部学生	校 友	その他	合 計
中央図書館 1998年度	22,277	123,977	856,533	147,543	41,213	1,201,543
前年度	20,104	110,856	898,381	111,638	63,400	1,204,379
高田早苗記念研究図書館 1998年度	4,422	45,390			3,826	53,638
前年度	4,800	44,256			3,816	52,872
戸山図書館 1998年度	5,418	36,385	370,102	34,113	3,375	449,393
前年度	6,775	36,034	402,843	23,818	3,456	472,926
所沢図書館 1998年度	3,794	15,797	103,184	1,749	2,250	126,774
前年度	3,793	12,659	106,803	1,149	2,141	126,545

注：理工学図書館の入館者数は、システムの関係上集計されていない。
注：高田早苗記念研究図書館の学部学生の利用は、その他に含まれる。

貸出冊数

中央図書館

	教職員	大学院学生	学部学生	その他	合 計
研究図書 1998年度	18,160	50,822	13,432	6,954	89,368
前年度	15,909	42,292	14,153	8,518	80,872
一般図書 1998年度	3,961	30,194	264,556	1,652	300,363
前年度	3,451	24,050	254,538	1,475	283,514
合 計 1998年度	22,121	81,016	277,988	8,606	389,731
前年度	19,360	66,342	268,691	9,993	364,386

高田早苗記念研究図書館

	教職員	大学院学生	学部学生	その他
図 書 1998年度	5,641	19,099	1,044	25,784
前年度	4,962	18,219	977	24,158

戸山図書館

	教職員	大学院学生	学部学生	その他	合 計
研究図書 1998年度	1,046	2,950	1,665	472	6,133
前年度	1,037	3,099	1,789	173	6,098
学習図書 1998年度	1,018	4,912	37,228	2,410	45,568
前年度	818	4,405	34,205	1,208	40,636
合 計 1998年度	2,064	7,862	38,893	2,882	51,701
前年度	1,855	7,504	35,994	1,381	46,734

学外相互協力

複写枚数



理工学図書館

		教職員	大学院学生	学部学生	その他	合計
理工学図書館	1998年度	1.357	6.546	7.288	1.096	16.287
	前年度	1.010	5.795	6.443	542	13.790
学生読書室	1998年度	1.409	20.836	155.072	998	178.315
	前年度	1.862	44.679	130.313	9.308	186.162
合計	1998年度	2.766	27.382	162.360	2.094	194.602
	前年度	2.872	50.474	136.756	9.850	199.952

所沢図書館

		教職員	大学院学生	学部学生	その他	合計
図書	1998年度	1.409	5.665	35.086	305	42.465
	前年度	1.172	4.751	34.850	212	40.985

	件数	文献複写	資料貸借	紹介状
中央図書館	依頼	1.552	554	1.720
	受付	2.820	537	2.257
理工学図書館	依頼	3.834	175	294
	受付	2.828	133	1.457
所沢図書館	依頼	2.606	75	47
	受付	1.469	1	32
計	依頼	7.992	804	2.061
	受付	7.117	671	3.746

注：高田、戸山は中央図書館の件数に含まれる。
中央図書館は謝絶を含まない。

	1998年度	前年度
中央図書館	4.751.506	4.807.986
高田早苗記念研究図書館	361.946	426.007
戸山図書館	879.188	764.524
理工学図書館	694.429	825.083
所沢図書館	283.538	280.174

1998年度 人事

専任職員 異動・嘱任 (管理職)

日付	氏名	新	旧
5・31	本間 暁	事務副部長兼総務課長兼映像資料課長	事務副部長兼総務課長兼雑誌課長兼映像資料課長
6・1	北風 貴紫	雑誌課長 [新規嘱任]	雑誌課
6・1	井口 牧二	所沢図書館担当課長	戸山図書館担当課長
6・1	井上真理子	戸山図書館担当課長 [新規嘱任]	戸山図書館担当課
11・10	志水 泰夫	学生部就職担当部長	事務部長
11・10	神保 裕行	事務部長	総合企画部長
11・10	本間 暁	文学部 (第一文学部・大学院文学研究科) 事務長	事務副部長兼総務課長兼映像資料課長
11・10	旭 英樹	総務課長兼映像資料課長	総合閲覧課長
11・10	三浦 育子	総合閲覧課長	図書館調査役
11・10	中西 裕	高田早苗記念研究図書館担当課長 [新規嘱任]	総合閲覧課
11・10	小川 充彦	演劇博物館事務長	高田早苗記念研究図書館担当課長

専任職員 異動・嘱任 (一般職)

日付	氏名	新	旧
6・1	小林裕一郎	学外連携推進室	整理課
6・1	普喜 康江	大学院アジア太平洋研究科・アジア太平洋研究センター出向	総務課 (プロジェクト)
6・1	金 知子	社会科学部	理工学図書館担当課
6・1	田中 和明	本庄高等学校	所沢図書館担当課
6・1	戸上 絹子	総務課	比較法研究所
6・1	福田百合子	整理課	理工学図書館担当課
6・1	尾崎 彩	総合閲覧課	人事部付 [新規嘱任]
6・1	長岡三智子	雑誌課	総務課
6・1	柳澤 清一	高田早苗記念研究図書館担当課 [商学部]	図書課
6・1	渡邊 幸之	高田早苗記念研究図書館担当課 [社会科学部]	社会科学部出向
6・1	御園 和之	高田早苗記念研究図書館担当課 [社会科学部]	教務部教育研究助成課
6・1	本間知佐子	戸山図書館担当課	社会科学部
6・1	平野 光子	理工学図書館担当課	高田早苗記念研究図書館担当課
6・1	野田 京子	理工学図書館担当課	総合閲覧課
6・1	大久保佳津子	所沢図書館担当課	診療所
7・15	高橋こずえ	所沢図書館担当課 [新規嘱任]	
11・10	仁上 園子	総合閲覧課	総務課
12・1	竹本 希	演劇博物館出向	図書課
12・1	松尾 亜子	総合閲覧課	演劇博物館
12・1	森 貴巳子	雑誌課	総務課 (プロジェクト)
12・1	高橋 静江	理工学図書館担当課	総務課 (プロジェクト)
12・1	斉藤 鉄生	総務室教学振興渉外プロジェクト [兼務嘱任]	
3・1	西山 亜矢	総務課 [新規嘱任]	

専任職員
職種変更

日付	氏名(所属)	新	旧
6・1	河口 和子(総合閲覧課)	司書職	事務職
6・1	前田 弘子()	司書職	事務職

専任職員退職

日付	氏名(所属)	所属
5・31	馬場 静子	所沢図書館担当課長
11・30	宮本 禎夫	理工学図書館担当課

図書館別職員数内訳表(C:理論値)

1998.6.1

	中央	高田	戸山	理工	所沢	本庄	出向	合計
管理職	8	1	1	1	1			12
司書職	41	12	3	7	2	2	7	74
事務職	10	4	2	5	2		2	25
学生職員	15	3	8	13	2			41
職員合計	74	20	14	26	7	2	9	152
派遣社員	6.2	4.1	4.3	1.9	2.8	1.6		20.9
請負:カウンター	14.6							14.6
請負:整備班	5.6							5.6
請負:日本マイク口	6							6
請負:紀伊國屋	30							30
人数合計	136.4	24.1	18.3	27.9	9.8	3.6	9	229.1

理工学図書館担当課

図書館別職員数内訳表(C:理論値)

1999.5.1

	中央	高田	戸山	理工	所沢	本庄	出向	合計
管理職	7	1	1	1	1			11
司書職	40	12	3	6	1	3	7	72
事務職	12	3	2	5	2		2	26
学生職員	13	3	7	12	2			37
職員合計	72	19	13	24	6	3	9	146
派遣社員	7.1	5.8	5.4	2.5	3.1	1.6		25.5
請負:カウンター	12.8							12.8
請負:整備班	5.3							5.3
請負:日本マイク口	6							6
請負:紀伊國屋	26							26
人数合計	129.2	24.8	18.4	26.5	9.1	4.6	9	221.6

派遣社員・整備班は延時間数をフルタイムで換算した理論数値。
各館合計時間数÷開館日数÷7時間=フルタイム換算数

研修関係

DIALOG システム基礎 ~

1998年4月3日(金) 7日(火) KMK デジテックス
(西新宿) 野尻幹人

日本図書館協会平成10年度第1回大学図書館部会委員会

1998年5月13日(水) 大阪府立大学総合情報センター
碓氷喜信

私立大学図書館協会平成10年度第1回自己点検・評価手法ガイドライン作成委員会

1998年5月14日(木) ~ 15日(金) 日本福祉大学
附属書館および安保ホール 小川充彦

私立大学図書館協会東地区部会研究部平成10年度第1回運営委員会・研究分科会代表者合同会議

1998年5月15日(金) 東洋大学白山校舎
北風貴紫
中元誠
仁上幸治

私立大学図書館協会企画広報研究分科会

1998年5月20日(水) 相模女子大学他9回
仁上幸治

防火管理者講習

1998年5月21日(木) ~ 22日(金) 東京消防庁消
防技術試験講習場 本間 暁

第19回 EDC セミナー

1998年5月21日(木) ~ 22日(金) 一橋大学佐野書院
渡辺洋一

BL INSIDE WEB 発表会

1998年5月25日(月) 化学会館ホール
河口和子

NACSIS-IR 講習会

1998年5月27日(水) 学術情報センター
高橋 昇

東京都平成10年度社会教育関係職員初任者研修(講師派遣)

1998年5月27日(水) 東京都庁 仁上幸治

第53回経済資料協議会

1998年5月28日(木) ~ 29日(金) 武蔵大学図書
館研究情報センター 渡辺洋一

私立大学図書館協会東地区部会総会・第1回研究会

1998年6月5日(金) 立正大学大崎校舎
志水泰夫
本間 暁



研修受講者等

北 風 貴 紫
中 元 誠
高 橋 静 枝
渡 辺 朝 子
佐 藤 嘉 子

OCLC ユーザー会・OCLC 講演会

1998年6月12日(金)新宿パークタワー 16階

本 間 暁
旭 英 樹
高 橋 昇
山 竹 由美子
福 本 宏 子
本 田 博
亀 本 道 政

法律図書館連絡会定例研究会運営委員会「法律図書館基礎講座」

1998年6月12日(金)慶応義塾大学三田メディアセンター

久保尾 俊 郎
今 村 昭 一

丸善株式会社「丸善マルチメディアフェア'98」

1998年6月19日(金)ブリヂストン美術館ホール

御 園 和 之
能 登 康 弘

私学研修福祉会第2次職員総合研修

1998年6月24日(水)~25日(木)グランドホテル浜松

齋 藤 鉄 生

1998年8月26日(水)~28日(金)

同 上

1998年11月26日(木)~27日(金)

同 上

私立大学図書館協会平成10年度第2回自己点検・評価手法ガイドライン作成委員会

1998年7月2日(木)~3日(金)京都産業大学図書館

小 川 充 彦

東京ドイツ文化センター図書館/情報センター「図書館員から情報管理者へ」講演会

1998年7月9日(木)東京ドイツ文化センター図書館/情報センター

北 風 貴 紫
服 部 光 泰

NACSIS-IR 講習会

1998年7月10日(金)学術情報センター

御 園 和 之

法律図書館連絡会・第3回幹事会

大阪弁護士会図書・情報処理委員会

「第2回西日本地区法律関係資料に関する図書館・資料室連絡会」

1998年7月10日(金)大阪市立大学文化交流センター

高 橋 昇

明星大学人文学部図書館情報学課程・図書館情報学講演会

1998年7月11日(土)明星大学学生会館第2会議室

御 園 和 之

日本図書館協会図書館学教育部会研究集会講演(講師派遣)

1998年7月26日(日)慶応義塾大学三田キャンパス

仁 上 幸 治

文部省主催著作権講習会

1998年7月29日(水)~31日(金)東京大学経済学部別館

平 井 志 都 葉

柳 澤 とし子

私立大学図書館協会平成10年度第1回東西合同役員会

1998年7月29日(水)神奈川大学横浜キャンパス

本 間 暁

小 川 充 彦

私立大学図書館協会平成10年度第59回総会・研究大会

1998年7月30日(木)~31日(金)神奈川大学横浜キャンパス

本 間 暁

小 川 充 彦

碓 氷 喜 信

東京消防庁消

私立大学図書館協会東地区部会研究部企画広報研究分科会

「1998年度企画広報研究分科会・夏期研究合宿」

1998年8月17日(月)~19日(水)文教大学学園八ヶ岳寮

仁 上 幸 治

私立大学図書館協会平成10年度国際図書館協力委員会準備室会議

1998年8月23日(日)~24日(月)金沢工業大学

仲 谷 由 香 里

国公私立大学図書館協力委員会委員長引継

1998年8月24日(月)千葉大学附属図書館

志 水 泰 夫

仁 上 園 子

私立大学図書館協会自己点検・評価手法ガイドライン作成委員会

1998年9月2日(水)北海学園大学

小 川 充 彦

平成10年度全国文献・情報センター人文社会科学学術情報セミナー

1998年9月17日(木)~18日(金)一橋大学佐野書院

高 木 理 久 夫

高 橋 晶 子

著作権情報センター・9月著作権研究会

1998年9月25日(金)虎ノ門

山 竹 由 美 子

日本図書館協会平成10年度第2回大学図書館部会委員会
1998年10月2日(金)大阪 碓氷喜信
私立大学図書館協会東地区部会・館長事務長会議
1998年10月9日(金)～10日(土)札幌
志水泰夫

法律図書館連絡会・法廷見学会
1998年10月9日(金)弁護士会館

服部光泰

第18回西洋社会科学古典資料講習会
1998年10月13日(火)～16日(金)一橋大学佐野書院

金子和代

第18回西洋社会科学古典資料講習会(講師派遣)
1998年10月13日(火)一橋大学佐野書院

雪嶋宏一

私立大学図書館協会自己点検・評価手法ガイドライン作成委員会
1998年10月16日(金)～17日(土)名古屋

小川充彦

平成10年度全国図書館大会第14分科会運営委員・セッション発表
1998年10月21日(水)～23日(土)秋田県民会館

仁上幸治

法律図書館連絡会研究会「法律図書館のためのフランス法とその資料」
1998年10月30日(金)東京大学法学部

服部光泰

法律図書館連絡会・第41回総会
1998年11月13日(金)専修大学120年記念館

高橋昇
服部光泰

駐日欧州委員会代表部・edc/dep トレーニングセッション
1998年11月18日(水)～20日(金)千代田区・ヨーロッパハウス

高橋昇

学術情報センター・平成10年度シンポジウム
1998年11月20日(金)日本教育会館一ツ橋ホール

服部光泰

国立国会図書館・第9回資料保存シンポジウム
1998年11月24日(火)国立国会図書館新館講堂

高木理久夫

新IRシステム及び新CAT/ILLシステム説明会
1998年11月24日(火)～25日(水)東京医科歯科大学

高橋正広
久保尾俊郎
本田博
野尻幹人
西村洋子

ガイ・ディンズ氏講演会
1998年12月2日(水)プリティッシュ・カウンシル
図書館情報センター

高橋昇
鈴木昌子

日本図書館協会平成10年度第3回大学図書館部会委員会
1998年12月3日(木)大阪府立大学

碓氷喜信

私立大学図書館協会東地区部・平成10年度第2回研究会
1998年12月21日(月)専修大学生田校舎

仁上幸治
御園和之
能登康弘

日本図書館協会平成10年度第4回大学図書館部会委員会及び研究集会第3回企画委員会
1999年1月22日(金)大阪府立大学総合情報センター

碓氷喜信

第103回CHEMICAL ABSTRACTS利用法講習会
1999年1月26日(火)文京区(仲居ビル)

野田京子

第20回文化財虫菌防除作業主任者能力認定試験及び講習会
1999年2月2日(火)～4日(木)自治労会館

藤原秀之

岐阜県図書館協会平成10年度図書館活動研究大会(講師派遣)
1999年2月5日(金)岐阜県図書館(岐阜市)

仁上幸治

私立大学図書館協会国際図書館協力委員会平成10年度第1回委員会
1999年2月12日(金)京都産業大学図書館会議室

中元誠

防火管理者資格講習会
1999年2月18日(木)～19日(金)

防技術試験講習場 旭英樹

経済資料協議会研究会
1999年3月19日(金)中央大学駿河台記念館

金子昌嗣
西山亜矢

修受講者等

日本図書館協会平成10年度第5回大学図書館部会及び研究集会第4回企画委員会

1999年3月26日(金)大阪 碓氷喜信

海外研修関係

職員海外研修(プログラムD)

1998年5月15日(金)~1998年9月11日(金)
オレゴン州ポートランド 金知子

ケンブリッジ大学図書館青井パヴィリオン職員派遣

1998年6月24日(水)~1998年12月23日(水)
ケンブリッジ大学他 竹本希

嘱任関係

私立大学図書館協会東地区部会研究部研修委員

1998年4月1日~2000年3月31日
北風貴紫

私立大学図書館協会東地区部会研究部運営委員(前任者人事異動にともなう後任として)

1998年4月1日~1999年3月31日
中元誠

山梨県史編纂専門委員

1998年7月31日~2000年7月30日
柴辻俊六

「図書館年鑑」1999年版編集委員会委員

1998年8月~1999年7月 中元誠

私立大学図書館協会国際図書館協力委員会委員

1998年10月1日~2000年9月30日
中元誠

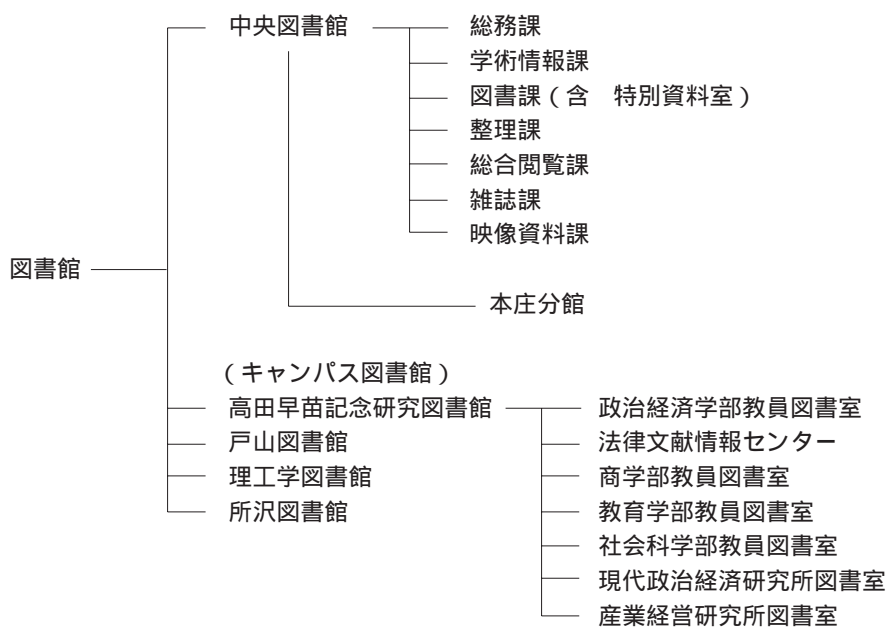
(前任者人事異動にともなう後任として)

1998年11月10日~2001年3月31日
中西裕

私立大学図書館協会協会賞審査委員会・研究助成委



図書館組織図 (1999年3月31日現在)



(司書出向箇所)

- ・演劇博物館図書室
- ・国際教育センターライブラリー (国際教育センター図書室)
- ・語学教育研究所図書室
- ・日本語研究教育センター学生読書室
- ・高等学院図書室
- ・本庄高等学院図書室
- ・メディアネットワークセンター
- ・アジア太平洋研究センター

<各委員会>

- ・資料委員会 ———— 本庄分館の運営に関する検討部会
- ・図書館関連規約に関するワーキンググループ
- ・洋雑誌問題検討ワーキンググループ
- ・広報委員会 ———— 展示部会
 - 「図書館紀要」編集部会
 - 「ふみくら」編集部会
 - 「薦」編集部会
 - オリエンテーション部会
- ・ネットワーク委員会
- ・研修委員会 ———— 研修部会
- ・カウンター連絡会
- ・蔵書管理調整連絡会
- ・図書館システム委員会 (メディアネットワークセンターと共同で所管)
 - 図書館システム委員会作業部会
 - 図書館システムワーキンググループ

図書館職員一覧 (1999年5月1日現在)

館長

浦川道太郎

副館長

兼築 信行

総務課長

旭 英樹

【総務】

中元 誠

今西 清

川村 稔

斉藤 鉄生

田中 一路

戸上 絹子

西山 亜矢

【総務】

【本庄分館】

荒川 正夫

昆 彰生

柳澤とし子

学術情報課長

藤巻 俊樹

【学術情報】

金子 昌嗣

奥村 佳郎

(兼)金沢美都子

(兼)高橋 正広

大河原豪人

図書課長

松下 眞也

【図書】

岩佐 直人

大坪 ゆき

小川 糸子

金子 和代

高木理久夫

本木 洋子

山戸 孝仁

雪嶋 宏一

渡邊 朝子

渡邊 孝之

野坂 昌弘

遅番

上野 和明

(特別資料)

大江 令子

小林 邦久

柴辻 俊六

藤原 秀之

整理課長

吉田 伸一

【整理】

福本 宏子

青木 繁隆

岩佐 圭子

今村 昭一

宇田川和男

岡田 瑞江

金沢美都子

鈴木 昌子

福田百合子

目黒 聡子

山川真紀子

総合閲覧課長

三浦 育子

【総合閲覧】 遅番

仁上 園子

河口 和子

久保尾俊郎

高橋 晶子

高橋 昇

平井志都葉

松尾 亜子

吉田 克己

喜久里康子

高橋 正広

尾崎 彩

森谷 博志

梯 智紀

橋本 玄

水迫 竜太

【高等学院】

豊田 彰憲

能登 康弘

【本庄学院】

(柳澤とし子)

【演劇博物館】

佐藤 嘉子

竹本 希

加藤 絢子

【インターナショナルセンターライブラリ(ICL)】

【国際教育センター】

仁上 幸治

【語研】

芝田 穂

(森山 啓子)

【日研】

副館長

深澤 良彰

事務部長

神保 裕行

雑誌課長

北風 貴紫

【雑誌】

仲谷由香里

多田 智子

長岡三智子

柳井 守利

森 貴己子

青木 真希

佐藤 一茂

西田 壘

遅番

原田 恭成

映像資料課長

(兼)旭 英樹

【映像資料】

(複写・マイク)

山竹由美子

河合 瑞気

(AV)

瀬山 峯徳

佐藤 忍

高田早苗記念研究
図書館担当課長

中西 裕

【高田早苗記念研究図書館】

(2号館) (政経・現政研)

中村里弥子

小野田照子

小泉 扶

長谷川早苗

服部 光泰

藤原真努香

鈴木 淳子

田尾 孝治

富澤 英生

加藤 早苗

渡辺 洋一

(法文センター)

千葉 範子

尾関 淳子

(教育)

細川 正子

吉澤 恵子

(商・産研)

柳澤 清一

(社会学)

御園 和之

渡邊 幸弘

戸山図書館
担当課長

井上真理子

【戸山図書館】

本田 博

小野 隆雄

月田 陽子

本間知佐子

伊藤 理香

五島 哲夫

田村 祥代

八百板徳高

(遅番)

酒井 清

岩井 義尚

谷本 秀将

福井 裕康

理工学図書館
担当課長

碓氷 喜信

【理工学図書館】

庶務

鈴木 田佳

吉村 文絵

図書

亀本 道政

高橋 宏

平野 光子

雑誌

前田 弘子

小原 貴彦

学生読書室

佐々木洋子

高橋 静枝

浅野 洋司

吉川 哲司

横山 一祐

遅番

吹井 久芳

松崎 一夫

所沢図書館
担当課長

井口 牧二

【所沢図書館】

岡田 広之

大久保佳津子

西村 洋子

高橋こずえ

金井江里子

【理工学図書館】

閲覧レファレンスサービス

夏井 友子

野尻 幹人

野田 京子

書庫管理・複写

岡田 敬之

山口 祐司

山崎 和幸

遅番

桑原 博行

中山健二郎

樋口謙一郎

ディアネットワークセンター】

荘司 雅之

【アジア太平洋】

普喜 康江